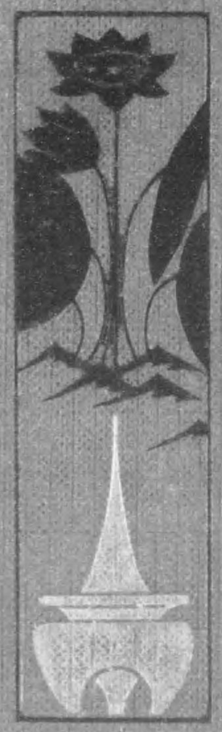
投

325
535



325-535

納

大僧正李多日生著

法幢

東京博文館藏版

大正
8. 3. 25
内交

國家國人情

黎民

大僧正日生

序

大僧正本多日生師は我宗教界に於ける一權威なり夙に我國民思想の推移するところを察し之を善導するの極めて緊切なるを悟り數々書を著して後進を訓へ又常に南船北馬の勞を辭せず東説西論席の暖なるに暇なきは世人の感謝して措かざる所なり而して今又法幢の著あり書を寄せ予に囑するに之に序せんことを以てせらる予不敏と雖ども憂を師と同うするもの焉ぞ故なくして之を辭する、ことを得んや乃ち先づ師の自序を執て之を見るに現今我國に三種の思潮あるを説き且我國民はこの三種の潮流に就き各去就を決す

れば足る復何ぞ惑ふを要せんやの言あり予讀て玆に至り師の氣宇の宏大にして其の立論の公平なるに感じ讃嘆の情油然として起るを禁ずる能はざるなり

顧るに予の曩に師に請ふて講演を海軍大學校に開かんとするや國民思想の變遷に留意するの必要を認め其の嘉すべきはこれを推奬鼓吹し其の憂ふべきはこれを爾前に防止せんとするの意に外ならざりしも今より顧みて當時の事を憶へば思潮の變化の激甚にして危險なる轉た痛嘆に禁へざるものあり而かも其の如斯を致せる所以のものは一には世の先覺者が之を導くに其の道を以てせざりしに由ると雖ども其の之に對する方針の消極的にしてこれを善導啓誘すべき確然たる目標なかりしによらずんばあらず假令必ずしも然らずとするも徒らに惡思想の宣傳を憂ひこれを防遏するに急にして反てこれを激勵せるの嫌なきにあらず是れ識者の齊しく認むるところなるべし法幢の內容は玆に之を縷述するの要なしと雖ども世人をして現下の思潮に對しこれを選擇自警するの必要を知らしめ併せて其の歸趨を明かにし我國民をして據るところあらしむるに與て力あるは毫も疑を容れざるところなり予曩に師の講演を聽き今又此著に接し歡喜の情に禁へず聊か所感を述べて卷首に贅すと云爾

大正八年一月

佐藤鐵太郎

序

人心思想の如何によりては、强大なる國家の基礎も、一朝にして倒壞し、廣汎なる世界の平和も、之が爲に攪亂せられ、光輝ある文明の建設得て望むべからず、斯の如きの事實歷々として各人の面前に展開し來たる。此に於て乎、世界を通じて形而下の學問に沒頭したりし學者も、皮相の施設に耽溺したりし爲政者も、形式的教授に囚はれし教育家も、迂愚なる教義を賴み、末節の事業に甘んぜし宗教家も、因襲の餘慶に眠りし貴族も、金力の萬能を夢みし富豪も、一齊に驚愕の眼を刮いて、各々擧措を失へり、そ

の狀雷霆霹靂し、大地震裂するの時、老幼婦女の馳騁して叫喚悲號するに似たり。

我國に於ても民心動搖の嘆聲は一時に四方より起りて、或は新思潮を理解せよと叫び、或は固有の文化を發揮すべしと唱へ、新舊思想の調和と云ひ、民心歸嚮の善導と云ひ、勞働問題の解決と云ひ、民衆生活の安固と云ひ、物價調節の政策と云ひ、普通選擧の改正と云ひ、多數幸福の施設と云ひ、種々の題目を揭げて論議す、復盛んなり謂ふべし。苟も思を民心の陶冶と文明の建設とに致す者は、この際に處して冷眼に看過すべきにあらず。今これ等の論議に對して、仔細にその論點と歸結とを考量するに、大體三種の潮流を畫せるを見る、一は新思潮を歡迎せよと稱し、輕跳にして東洋文明の眞價を閑却し、東洋文明の有する最高の意義を領知せず、遽々然として世界的潮流の語に動かさるゝ者是れなり。二は我國固有の文化を守持せよと稱し、固陋にして內は我國文明の正統たる三大思想の調節を逸し、頗る狹隘淺薄に甘んじ、外は世界の文明に對して、之を取捨し洗練するの雅量を缺失する者是れなり。三は彼の輕跳にして世界の潮流に盲從し、東洋文明の權威を無視せるの愚を誡め、又彼の固陋にして狹隘なる因襲の見に執し、時代の推移と人心の機微とを察知せざるの迂を警め、堂々として我が東洋に存在せる正大悠遠の道を明かにし、包容統一の

道を示し、內には歷史的に融合したる、三大思想の文化を發揚し、外には世界の文明思潮に對して、適當なる取捨洗練を遂げ、毅然として守持すべきは之を守持し、豁然として開發すべきは之を開發し、洋々として攝取すべきは之を攝取し、斷々として改造すべきは之を改造し、猛然として排除すべきは之を排除し、熟慮すべきは結跏趺座して之を靜思し、實行すべきは四方に遊行して之を宣傳し、因つて以て最高最大の文明を我國に建設し、行いてはこの理想的文化を四海に布くこと、恰も日の東天に昇りて次第に西海を照すが如くなるべしと云ふ者是れなり。この三者を新思潮派固有派中正派と稱するも可、復輕跳派固陋派開顯派と稱するも可なり。我が國民はこの三種の潮流に就て、各々去就を決すれば足る、復何ぞ惑ふを要せんや。

予曾て大正二年の頃海軍大學甲種學生の爲に、道、國民道德、國民思想の三大題目に就て講述せしことありしが、今その稿本を取つて之を閲するに、一々目下の思想問題に接觸し、前記三種の潮流に對して、商量批判を下せるを見、自ら顧みて破顏微笑せり、此に於て乎、聊か刪正を加へて、之が發刊を博文館に託せり。この書幸に民心の陶冶文明の建設に寸益あらば、是れ實に望外の幸慶なり。

序

大正八年一月二十三日

本多日生

一〇

法幢

目次

道

一　志道……一頁
二　正大悠遠の道……八
三　包容統一の道……一五
四　西洋思想の概觀……一五
五　儒教思想の概觀……二七
六　佛教思想の概觀……四一
七　皇道思想の概觀……四六

國民道德

目次

一 意義……五一
二 考察……五六
三 針路……六三
四 國家觀……七八
五 國家の起原……八五
　イ 天命說　ロ 契約說　ハ 家族說　ニ 征服說　ホ 必要說　ヘ 心理說
六 國家の目的……九九
　イ 個人本位說　ロ 天命順行說　ハ 法治說　ニ 人民保護說　ホ 公共幸福說　ヘ 人民制御說　ト 對外關係說　チ 國家實利說　リ 國家至上說　ヌ 理想的國家說
七 國體觀……一一六

　イ 文明程度說　ロ 皇統一系說　ハ 世界總攬說　ニ 靈德理想說　ホ 靈氣不可侵說　ヘ 君臣感合說　ト 後德獨玄說
八 國家觀の根本問題……一四九

國民思想

一 調整統一の必要……一七四
二 調整統一の針路……一九四
三 固有文明の調整統一……二〇七
　イ 神道の起原、性質及び學派……二二四
　1 純神道　2 一實神道　3 兩部神道　4 唯一神道　5 三教融合神道　6 社家神道　7 垂加神道　8 復古神道　9 教會神道　10 新研究の神道

ロ　儒教の傳來、學派、性質及び日本化……二六九
甲　儒教の傳來……二七〇
乙　儒教の學派……二七七
1　朱子學派　4　堀河學派　7　折衷學派
2　徂徠學派　5　武教學派　8　註疏學派
3　古學派　6　陽明學派　9　獨立學派
丙　儒教の性質……三〇四
丁　儒教の日本化……三〇八
戊　德川時代に於ける儒者の性行……三一六
ハ　佛教の性質及び日本化……三二一
一　佛教の性質……三二二
1　佛教の大觀……三二二

2　佛教の生命……三二一
3　佛教の容量……三二九
4　佛教の本質……三三二
5　佛教の教義……三三九
6　佛教の行法……三三五
7　佛教の効果……三三八
二　佛教の日本化……三四〇
1　日本國と佛教……三四〇
2　我が國體と佛教……三四〇
3　我が國民性と佛教……三四一
4　儒教と佛教……三四二
5　佛教の使命……三四九

以上

法幢

大僧正　本多日生著

納本

道（一）

志道

精神修養の第一著手は、『道に志す』と云ふことより始まる、抑〻道とは、吾々の思想行爲の標準たるべきものを指す、諸般の行爲でも、又何處に持つて行つても、從はなければならぬ權威を有して居るものが道である。萬人に通じ古今に通じて、規範法則となるものが、卽ち道である。さうして其道を得たいと云ふ欲求渴仰が志であります。

近來は道の觀念が冷却したやうに思はれる。修養の聲は高いけれども、多くは片々たる主義と方法に依つて、間に合せの事をやらうとする氣風が盛んである、勿論國家の健全なる方面に於ては、さう云ふことはなからうけれども、全體の風潮としては、片片たる小さな主義や思想を捉へて、さうして終生の行爲を導かうとするので、初めの着想を誤つて居る者が多いやうに思はれる。

この思想の標準を得たいと云ふ考、卽ち言を換へて云へば、道に志し、道を學び、道を行ひ、道を樂しみ、道の中に生きようとするの精神が、修養問題に就ては根本を成すものであります。故に古聖賢の敎に依つて考へますれば、孔子は終生道德の敎を種々に說かれたけれども、一言以つて之を蔽へば『志』の一字であると言はれて居る。道に志すと云ふ事より外に、修養は無いと言つて宜いのである。又孟子は『志』を擴めて『養氣』と云ふ二字にしたと言はれて居るが、今論語を讀み、孟子を讀んで、之を研究するに、『志』と謂ひ、『氣を養ふ』と謂ふことが、孔孟學の生命となつて居るのである。更に佛敎の方に就て見るに、『發心』を根本として居る、譬へば泥中の蓮の如く、人間の思想中に美しい華を開かしむる本があると、佛は說かれて居る。先帝陛下の御製を拜すれば、

おのか身を修むる道は學はなむ
しつかなりはひいとまなくとも
竝ひ行く人にはよしやおくるとも
正しき道をふみなたかへそ

とあり、神武天皇の大詔の中には

上ハ乾靈(アマツカミ)ノ國ヲ授ケ玉フ德ニ答ヘ　下ハ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ

と仰せられて居る、この『正しきを養ふの心』が精神修養の根本であり、正しきを養ふの心が大和魂であり、正しきを養ふの心が我國の天職を實現する原動力である。國家の總ての力は、此正しきを養ふと云ふ所より發現し來たるので、それが我皇室に在つ

ては、御稜威となり、國民に在つては、國民の美風となつて發現して行くので、元は正しきを養ふと云ふことが出發點である。故に山鹿素行先生の『士道』の中には最初に『本を立つ』と云ふ題下に第一に『己が職分を知る』ことを擧げ、次に『道に志す』ことが擧げられて、『其志の立つことあらざれば道に到るべきやうなし』と論明されて居る。大學の中には『君子有二絜矩之道一也』と云へり、絜矩と云へば權衡と尺度であるが、絜矩の道に依らざれば君子となるを得ず、この道を離るゝ者は小人である。權衡尺度は自分だけで定むることは出來ない、自分だけで權衡尺度を作つて、之を他人に用ゐさせようとしても、通用しない、甲乙丙丁が使つて宜いと云ふことになつて、始めて權衡尺度の意義をなすのである、大學の中に、絜矩の道は上の人にも下の人にも、前にも、後にも通じて動かざるを謂ふとあり、遍ねく用ゐて動かざる所が尊いのである。

國民道德と言つて、日本だけに通用しても外國に通用せぬもののみならば、健全の

德とは言へぬ、無論其國の境遇、地理、風俗、習慣、歷史等の關係に依つて、國民に適應せる特殊の道德はあれども、併し特殊の點のみにては、健全な德性を養ふ上に、大缺陷を生ずるのである。之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らざるものがあつて、更に天地の公道に照らして動かざるものが無くてはならぬ。さうして其大きな立場から、時と處と物とに應用して動かざる所の道を奉ずべきである。

然るに現今は形體の學問を重んじ、自分勝手に大事を決せんとする風がある。形體の學問はそれでもよいが、堂々たる道德觀念、國民理想までも、自分勝手に決定せんとするは、甚だ憂ふべきことではなからうか、道に志した以上は、普汎に及ぼし、上下に通じて、悖らざるものでなくてはならぬ。さうするには先づ道を學ばなければならぬ、故に孔子は次の如く言へり『吾嘗終日不レ食終夜不レ寢以思無レ益不レ如レ學也』と、又論語の終りに左の如く言へり。

好レ仁不レ好レ學、其蔽也愚。

好レ知不レ好レ學、其蔽也蕩。
好レ信不レ好レ學、其蔽也賊。
好レ直不レ好レ學、其蔽也絞。
好レ勇不レ好レ學、其蔽也亂。
好レ剛不レ好レ學、其蔽也狂。

仁、知、信、直、勇、剛何れも貴とき德行なるも仁を好んで聖賢の道を學ばなければ、その結果は愚となる。又直を好んで學を好まなければ、絞と云うて固くなり過ぎる、六蔽の誡めは皆道を學ばざるの失を示すのである。

さて學ぶとしては、道に種々の名がある、我が國に於ても、皇道とか、神道とか、武士道とか云ふやうの語が行はれて居り、これが皆別なものゝやうに考へられて居る。勿論特殊の點には異なる所はあつても、皆一樣の源から發して居るものである。又我國の文明には、應神天皇の御宇から儒教が入つて、長き時代を經て、我國の文明に融合されて居る。今に於て儒教を惡いと言つても、既に吾々の血となり、肉となり、生命となつて居るから、之を棄つることは出來ぬ。尤も儒教の害を爲した所もあるが、未だ洗錬陶冶されて居らぬ所もあり、既に儒教が傳來してより古くはあるが、未の部分を十分日本の文明に融合して居らぬ所もあるから、中々棄てるどころではない、益〻洗錬陶冶を加へて行かなければならぬ。又更に西洋の思想が入り込んで來たのであるから、同じく西洋の思想も、洗錬陶冶して行かなければならぬ。されど思想の取捨には順序がある。我國には數千年來融合して來た道德、卽ち儒教、佛教がある、それ等を十分洗錬陶冶せずして、新たに西洋の思想を入れても、それは恰も朝鮮も滿洲も未だ消化せざるに、之を措いて亞米利加を取らんとするが如く、愚なる考である、この順序を重視せざる者は、輕擧たるを免れぬ。先づ千數百年來調和し來れる近きものを消化して、血とし肉とし、それより更に進んで行くやうにしなければならぬ。又彼の狹隘なる神道家守屋が、佛教を排斥したやうな思想を、今日に復活するならば、國

を謬ること是より甚しきは無かるべし。日本の文明を進め國威を輝かさんとするには、先づ國民の思想問題を重んじ、優秀なる文明を作らなければならぬ。孟子曰く、

作ッテ於其心ノニ害アリ於其事ノニ作ッテ於其事ノニ害アリ於其政ノニ。聖人復起ルトモ不レ易ヘ吾言ヲ矣

世の中に弊害が起るのは、思想の問題が根本であつて、それが形に顯れ、遂に政の上にも害があり、國家を治め、國運を進めて行く上にも困難を生ずるのであるが、本を云へば思想の問題である。後に聖人が出て來ても、之には反對することは出來ぬと、孟子が揚言して居る。

(二) 正大悠遠の道

近代は分類とか專門とか云ふことが盛んになり、隨つて技巧の末に走り、纔かな事でも何か新しき事を考へ、變つた事を考へなければならぬと云ふので、珍しき事はあるまいかと探ね、さうして新を逐ふに至り、知らず識らず小徑に走るやうになつたのである。

道は正大なるべし、悠遠なるべし。博厚なるべし、高明なるべし、敎育勅語の中には『國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ』とあり、決して片々たる小徑に走るを許さず、中庸に『博厚所ニ以載ツル物也。高明所ニ以覆フ物也。悠久所ニ以成ス物也』とあるが、先帝陛下は

朕道ヲ學ブ豈一二年ニシテ止マンヤ將サニ畢生ノ力ヲ竭サントス

と仰せられ、又御製には

大そらにそひえて見ゆる高根にも
登れはのほる道はありけり
わけはやと思ひ入りぬる道にこそ
高きしをりも見えそめにけれ
開けゆく時にいよ〳〵仰かれぬ

ひしりの御代の高きをしへを

如何に世が進歩しても、東洋の鞏固なる根據を有する文明は、現代の學說に動かさるべきものではない。中庸に『君子之道闇然而日章。小人之道的然而日亡』とあるが、君子の道は闇然として迂遠のやうではあるが、この闇然穩々として居る中に、不磨の眞理が含蓄されて居るから、それが時を經るに隨つて章かになるのである。又小人の道は的然として、寔に明白且つ適切のやうに思はるれど日が經つに隨つて亡び去るのである。

殊に我國民の道は、我國の天職に鑑みなければならぬ。我國の天職に就ては後に詳論する考なるが、東洋の一孤島として滅ぶべきものでなく、又武力を以て征服を縱にすべきものでもない。高き理想を奉じて、世界の文明に寄與せんとするにありされば我が國民の品性は、特殊性と同時に普遍的の德性を有し、中外に施して優秀のものでなければならぬ。孟子が言つて居る。『居二天下之廣一居二立天下之正一位。行二天下之大一道。』

と、我國を東洋の一孤島とした、鎖港攘夷的に思想を區劃して、健全なる文明を實現し得べしと思へるは大なる謬見なり、我が國民は天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ふの自覺を以て、品位文明に於て優秀を期せねばならぬ。『居は氣を移す』と云つて、高い山に登れば立派な精神になり、心が大きくなる。我が國民の道德は天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ふとの覺悟があれば、片々たる論議は消滅し去るのである。御製に

國といふ國のかゝみとなるはかり
みかけますらをやまとたましひ

とあるが、世界の模範的精神が大和魂である。孟子は言つて居る。

天之生二此民一也使二先一知一覺後一知一使二先一覺一覺後一覺也。予天一民先覺者也。
予將下以二斯道一覺二斯民一也。非二予覺一之而誰也

と、實に壯快なる抱負である、吾々日本人は生民の先覺者として立たなければならぬ。

日蓮上人が『我れ日本の柱とならん、日は東より出でゝ西を照す』と言ひしは、日本人の天職を喝破せるものである。神武天皇が

天業ヲ恢弘シ天下ヲ光宅スルニ足ルベシ蓋シ六合ノ中心カ

と仰せられしが、天業とは天に代つて德を行ふことにして、卽ち世界の文明に貢獻し、理想の文明を完成するにあり。啻に人類の先覺者たるのみならず、天地の公道に照らして謬りなからんを期す。陛下の軍人に賜はりたる勅諭に『天地の公道人倫の常徑』とあり、又五ヶ條の御誓文中に『天地ノ公道ニ基クベシ』と仰せられたり、故に我が國民は天地の萬物を覆載するが如くに、世界萬民の覆載者を以て立たねばならぬ。これ卽ち　陛下の思召に遵ふ所以である。

更に進んでは『神明』と云ふ觀念に立つ、公道と云へば筋道のやうに聞へ、公理定理のやうに思はるゝが、天地の公道が人格化して光明を發し來れば、それが卽ち『神明』である。御製に

眼に見えぬかみの心にかよふこそ
人のこゝろの誠なりけれ

と、人間の先天に有する性能を以て直覺すれば、宇宙の玄妙を窺ふことが出來る、科學實驗の知識に於ては疑はしきことも、先天直覺の性能に憑ふれば、正大悠遠なる神德と正大悠遠なる明德と相通ずるものあり。中庸に『誠者天之道也。誠之者人之道也』とあり、誠は天にして博厚、高明、悠久の德を備ふ、人も修養を積めば博厚、高明、悠久の德を顯はす。故に誠は天の道と云ふ。御製に

朝みとりすみわたりたる大空の
ひろきをおのかこゝろともかな

と、我が國民にして精神修養に志す人は、正大悠遠の道を求めねばならぬ。

(三)　包容統一の道

次に考量すべきは包容統一の道なり、博く容れて之を洗錬し且つ統一する道を求むべし。今人多くは道德は進化すと云ひ、又は單に不朽の道なりと云つて、互に相爭ふ、卽ち保守的思想と進步的思想とが戰ふのである。されど常に變化して定らざれば道德の權威はない、又少しも進化なしとせば固陋に陷るべし。故に古今に通じて謬らず、中外に施して悖らず、而して日々に新なるものでなければならぬ、是れ體道用道の敎ある所以なり。御製に

善きを取り惡しきを捨てゝ外つ國に
おとらぬ國になすよしもがな

とある、道は包容統一の精神を以て洗錬して行かなければならぬ。過去に已に融合し得たる文明までも貧弱にするのは愚の骨頂である。それは我國を謬まるものである。

我かそのにしけりあひけり外つ國の
草木の苗もおほしたつれは

と、示さる、我が國民は天民の先覺者を以て任じ、包容統一の道に立つべきである。

(四) 西洋思想の概觀

これより簡單に西洋思想の概觀、儒敎思想の概觀、佛敎思想の概觀、皇道思想の概觀に就て、その輪郭を見んとす。

西洋思想の傾向は實際は穩健になりつゝあると思ふ、哲學は一元的傾向を取り、一元的傾向は卽ち統一的傾向であり、片々たる主義を否定して居る、唯物と謂ひ唯心と謂ひ或は有神と稱するも、その根元は一なりとの統一觀念に進まんとして居る。

又倫理道德を高潮し、宗敎の健全なる方面を擴張せんとして居り。又快樂主義は個人の快樂を得ると云ふにありしが、後に功利主義に傾き、更に現在は直覺的功利主義となれり、直覺的功利主義とは、人間には社會性がある、これが個人の中軸をなして居る。家庭の爲め社會の爲め國家の爲め人類の爲めに貢獻することに於て、自身が滿

足するのが、人間の本能である。それが歴史なり社會の事情に接觸して、善き性格を發現し來たるのであると云ふのが、直覺的功利主義である、同じく功利主義と云つても卑近の快樂を目的としないで、道德的に世の文明を進めて行くことに於て、自己の精神に滿足を得ると云ふのである。

又耶蘇敎も超絶を理想として、一旦は世の中を悲觀したけれども、段々現實化して世と調和するに至つた。一方に快樂主義、功利主義も今言ふ如く社會性を重んじて、何でも世の中の爲めにならねばならぬと云つて、博愛の精神となり、社會救濟の働きとなつた、健全の分子がそこに在る。

又絶對主義と自然主義とありて、絶對主義は一切を神に任すので、善いも惡いも神のまに〳〵であると言ひ、或は豫定論定道論なるものありて、運命は神の支配するものと考へて、自分の努力を否定し。その他方には之に反對して、吾々は自然の法則に支配されて居る、卽ち天則で支配されて居る、決して神の意思に支配さるゝものではないと云つて爭つて居た。又科學の思想が起つて世の中の事は總て器械的の法則に依つて支配さるゝものと云ひ、熾んに喧嘩して居つたが、近頃はそんな爭ひは愚であることを悟つた、今日では內含的目的、卽ち人は各自の精神の中に立派な進んで行く目的がある、天然の器械的の規則に支配されない、吾々の精神力に依つて、立派に文明を進め得ると考ふるに至り、良智良能と謂はうか明德と謂はうか、丁度さう云ふものを認めて來た。之を人本主義と謂つて居る、神の力にのみ依賴せず、又自然科學のみに依賴せずして、人間の力に依つて世の文明を進め得ると云ふのである。

又此外に自由主義、必然主義と云ふがある、自由主義は個人の自由を極端に世の中に及ぼさんとし、吾々は絶對の權利を有つて居る、法律に依つても何に依つても支配されないと唱ふるものありしが、そんな暴論は行はるべき筈がない。又必然主義は之に反して、一切天地の支配を受けて居るので、氣儘な事は少しも出來ぬと論じ、自由の思想を悉く否定して居た。この必然主義の如きも、自由主義の如きも、今では皆否

定されて居る、然かるに面白半分に世の學者がそんな事を論ずるから、青年等がそれに迷ふのである。

又個人主義と國家主義と爭つて居つたが、今日個人主義がどう云ふ傾向を示して居るかと云ふと、吾々個人の理想個人の幸福は、社會國家とよく調和して行くやうにするのが、自分の理想を表現する唯一の方法であると云ふ、傾向を示して來た、要するに個人主義も國家主義もその歸結に於ては一致することになるのである。

又博愛主義と利己主義とあつて博愛主義は親疎の差別なしに、一樣に平等博愛と云ふことに走つて、君も親も他人も區別ないことゝして居つた。一方には利己主義で自分の事のみを考へて親も兄弟も構はない、自分さへ善ければよいと云ふ主義があつたが、是等も今は何れも否定されて、耶蘇敎の中にも矢張り秩序を立て、物事を節するに順序を以てすることゝなつて來た。利己主義も極端に利己を欲すれば、反つて自分を滿足せしむることが出來ぬ、己れを滿足せしめんとする精神の結果は、遂に功利主義に入り、更に進んで直覺的功利主義に引き入れられ、己れを利せんと欲せば、亦他を利せなければならぬと云ふことになつて來たのである。

主義は何れにせよ人間の卑しい心はどこから起るか、必竟修養が足らんからである、感化の力風敎の德が衰へたら、必ず頭を擡げて來る、社會主義の如きは一方には法律萬能の點に反對して起つたので、是が起つたのは色々の原因があるが、彼の超絶思想に捉へられた精神からも起つて居り、又哲學者の絶對平等の精神から、吾々は神と一なりと云ふことを誤解して、何人も吾々を支配する權利はないと云ひ、或は政治上の民約論が極端に走せて、絶對の自由を夢みて一切の支配を否定するに至る等、種々の原因はあるが、最も激しく刺戟したのは經濟問題である、富める者の權利を法律が保障し、金を貸して證文があれば、どんな困窮な者でも返させることが出來ると云ふ富豪の權利が保障され、一方には唯物主義、科學主義の結果は、生存競爭優勝劣敗を金科玉條と誤認し、その反面に社會の生存競爭に弱つて來た者が、社會主義を起すやう

になつたので、曩に優勝劣敗を主張した學者も、これは餘り大きな聲で言ふことは出來ぬと云つて、口を閉づることゝなつたのである。社會主義はまだ目的を達しないで猛烈な思想を抱いて居る、然れども落ち付く所は國家的社會政策に依つて之を救ふより外はない、法律萬能の夢は破ぶれて、今日では法律も人情道德を參酌し德敎の精神が參酌されて來た。故に今日では德敎を無視するやうな法律家は一人も無い次第である。

斯の如く種々の問題が何れも中正不偏の方向に向ひ、一元調和の傾向を取つて居る、故にこの傾向に更に洗鍊を加へて考へるのがよいので、現代の健全な思想にては、佛敎の健全なる分子も、儒敎の健全なる分子も、耶蘇敎の健全なる分子も、西洋の文明の健全な方面も、皆吸收して堂々として進まんとして居る所のものである。唯學ばざる者養はざる者がある爲め、今の文明が危險の外形を呈して居るのであつて、天下の思想界は悲觀するに及ばないのであります。迂ツかりすると瞬間の快樂を取らうとする快樂主義或は極端に國家の組織を破壞せんとする社會主義と云ふやうなものが起つて來るが。是は決して主義が立派なる爲めに起るのではない。人間が修養を怠り、社會の施設に不備がある爲めに起つて來るのである、されば國民を導く上に於て、さう云ふ思想を根柢より矯正し、壓迫を加へてはいかぬ。三軍の帥は奪ふべくも匹夫の志は奪ふべからずで、既に思想が捉へられて仕舞へば仕方がないから、何時も健全な敎化を重んぜねばならぬのである。

世界の思潮はなか〳〵高遠のものであるから、唯眞ッ正直に我國風であると言つて狹隘なる主義の上に立つて居つたのでは迚も進取の目的を達することは出來ないのであります。さう云ふ事に就ては私共の考は少し變つた思想を有つて居りますから今日申述べて見ようと思ひます。

西洋思潮の健全なる方面に於て殊に注意すべきは、前に云ふ通り統一的傾向一元的傾向であつて、今迄は唯物思想或は基督敎思想が衝突の形で現れて居つたけれども、

西洋の方でも健全なる思想の人は之を調和統一して進んで往かうと考へて居る。又倫理の上に於ては內含的目的と謂つて一切の高遠なる理想は吾々の精神に先天的に有つて居り。人は良心の聲に聞いて活動しなければならぬ。その良心を普遍的に認むる場合に社會性を必要とするのである、社會の調和を保つて往く所に國家思想も起り、色々社會の爲めに盡さなければならぬと云ふ犧牲の精神も起つて來るのであり、而してこれ皆良心に含んで居る性能である、更に又社會の組織體制に於ては理想の國家を主張し、廣く世界各國の有樣を調査して、自國を理想の國家に造り上げようと考へて居るのである。

この理想の國家と云ふは、大いに道德的になつて來なければならぬ。今迄は權略と武力と經濟とを主に置いて居つたが、今後は思想の方から卓越したものを打ち建てゝ來なければならぬ。それには道德的意味に於て優秀なるものでなければならぬと考ふるに至つたのである。

その外に宗教の側に於て西洋の優れて居る點が少なからぬと思ふ、それは第一宗教を研究する意が非常に進んで居る、日本人は相當の知識あり相當の位置に在る人でも、宗教に對する思想は纏つて居らぬ。西洋では宗教に對する研究なり知識なり信仰が整ふて居る、この點は確かに日本人が注意を拂はねばならぬ、その中には人間の靈の力を說く。一方に物質的の文明が進んでも、他方には盛んに人間の靈の力を說いて居り、心靈の生活を叫んで居る、この靈の研究に於ては、儒教に依つて薰陶された日本人よりも、西洋人の方が確かに進んで居る。

それから『愛』と云ふ觀念である、西洋では此宇宙を愛の意義を以て觀て居る、即ち溫き宇宙を說明して居る、我國の宇宙觀は迚も基督教の宇宙觀程に溫き意味となつて居らぬ、天地の公道と云つても敬神の觀念と云つても、多くの人は形式的に考へて居る、天地の公道と云ふ意味をそう重く思はず、又國民は敬神の心を有たなければならぬと云つても、その考が基督教の愛の宇宙觀のやうになつて居らぬ、又博愛主義と

云ふことも一方に弊竇は起るが、人道の力を有する點に於て、狹隘の主義から之を攻擊するやうでは、到底天下に事を成すことは出來ぬ。細かい事は後に述ぶることゝし、又その批評も後に讓るが、斯かる意味に於て西洋の健全なる思想を認むべきである。

さりながら他方にはその病毒も少からぬのであるから、之を識別するが肝要である、元來西洋では學問も宗教も政治も最初に模範的のものが現れてないで、次第に改良して來たものである。學問も希臘にプラトーンやアリストテレースの如き豪い哲學者が出たが、併し後の哲學者に由つて、その說は覆へされたので、學問も次第に改良せられて來たのである、初め希臘が開けて希臘の學問が羅馬に入つたのであるが、程なく基督教の精神に依つて學問が覆され、學問の力は宗教の力に屈服して、それが爲め學問が衰へて仕舞つた。最初は天啓宗教で神のお告げを信じ、それに依つて、知識的研究をすることを拒み、盲從的に信仰を强いて來たのである、學問の本領は人間の知識を擴めて行くのであるから、天啓を固守して人智を壅塞すると云ふので、近世の文明が起つて來た。さういふ次第で宗教も學問も動搖が激しいのである。政治上に於ても羅馬の法律は進んで居つたけれども、政治の革命が度々起つて居る。故に西洋は學問も宗教も政治も改造〳〵と云ふことになつて居る、是は忘れてはならぬことである。この點は東洋は全く之に反して居り、西洋では建國の精神はその理想の輪廓さへも分らぬので、その內容などは明確になつて居らぬが、我國は最初に建國の理想が定つて居り、これに基いて國民は雄大なる心を有つに至つたのである。又支那の學問では周公孔子の學が早くより開け、中庸の思想が本となつたから變化を受くることが少い、變化しても根本は動かない、不變不朽の上の小變化である、我國も政治なり學問なり宗教なりが變化しても、大きな思想中の小變化であるから、その根本には影響を受けない。然るに西洋に於ては根本から覆されて、思想も革命を經て來て居る。又佛教の思想も釋迦一人に依つて立てられたのであつて、廣大なる思想を有して居るから、その中に

宗派が起つても、根本から覆さるゝことはない。これは少なくも東洋文明の特色である、今迄は進取の氣象に乏しかつたのが缺點だが、これに進取的の氣象を加へて、而もこの根本を發展して行けば、健全なる文明を造り出すことが出來る譯である。

由來西洋の思潮は極端に走る弊がある、誰しも知れる如く肉慾的に現れた自然主義、又は現在の名利を重んずる現實主義、又は器械的に一切の事を判斷する科學的思想が現はれて、人間の靈の方面にまで器械的の思想が入り、又は極端なる個人主義が利己主義となり、優勝劣敗の思想より、猛烈なる破壞主義となり、或は法律に捉はれて情誼を輕んずるに至りたるが如きは、これ皆西洋思想の弊害の側である。是等は何れも病源を唯物思想より發して居る、例へば自然主義は元より多少の弊はあるが、唯物主義が加はるに至つて激しく墮落し、快樂主義も唯物思想が加つて、非常に害毒を流すに至り、又法律も唯物主義が加はつて弊害が多くなつたのである、何れも病源は唯物的思想に在ると言つてよい。

それから宗教の側にも天啓主義の固陋なる弊がある、聖書に書いてある事とか、モゼスの言つた事に拘泥する、それから又基督教は一旦得た神權主義の思想に捉はれ何となしに、國家の權利に食ひ込み、我國に來ても尙ほそれを夢みる風がある。又一神を孤立的に見て他を排斥するから、此點は餘程考へなければならぬ、博愛思想も大切であるが、我國の忠孝道德と調節を計らなければならぬ、それには愛の秩序、儒教で云へば『義』、卽ち之を節するに宜しきを以てする觀念がなければならぬ。夫等の事は日本の理想を以て解決して進むべきである、之を包容し之を調和し、統一的大理想の下に融合せしむべきである。唯だ此方の奉じて居る理想が狹隘であると、是等の何れの思想とも直ちに衝突しなければならぬ、一々論じて行くと長くなるが、先づざつとさう云ふ譯であります。

(五)　儒教思想の概觀

儒教は聖賢の道と稱し、萬古不磨の大道を含む、故に我國に於て既に洗錬し了はりしものは之を尊重し、その捨つべきは捨てゝ、日本の文明を大成する援けともすべきである、人間社會を指導する根本は德教に外ならぬ、而して儒教は確かに道德教である、

大學の始めに、

大學之道在レ明ニ明德一。在レ親レ民在レ止ニ於至善一。

程子は『親』を『新』と讀まして居るが、これは『親』と讀むが宜いと思ふ。卽ち明德を明かにすることと、民を親しむことと、至善に止まることゝの三つが、德教の精神として、萬古不朽の大道である。明德とは吾々の固有する誠心にして、又良知良能とも稱す、一切の德行を發現する源泉である、或は仁義禮智となり或は智仁勇となる、西洋の內含的目的、直覺的功利思想と大いに同じきを見る。論語には、『君子の性とする所は仁義禮智、心に根す』と云ひ、心に德の萌芽があつて之を培養し開發して行けば、諸種の德行は發現すると云ふ、之を朱子は、

至ニ於用レ力之久而一旦豁然貫通一焉、則衆物之表裏精粗無レ不レ到而吾心之全體大用無レ不レ明矣

と言へり、一旦豁然として貫通すれば、衆物の表裏精粗悉く知ることが出來る、さうして心の全體大用明かならざるなしと云ふ、これ確かに一箇の格言である。この個人的の良心が社會性を現はし、卽ち民を親しむと云ふことゝなり、進んで一切の道德を磨き上げて、至上善に精神を止むると云ふのである、それより『仁』と『義』とが發現して人倫五常となり、君臣の間には『忠』となり、父子の間には『孝』となるのであり、我が國民道德の忠孝もこの明德から發したのである、又仁義の間に相卽不離の關係を取るに至つて居る。仁と義との間に相卽不離の關係がなければ、國民道德と世界道德を兼備することは出來ない。若し日本人民が特殊の道德に限りて、世界的道德を有たなければ、この仁義の原則卽ち道德の大精神に反對することになる。特殊の所は優れて居つても、人道に對して力がなければ、それは愚なる倫理である。この仁義

の兩面を有する儒教は、全くその中庸を得たものである。

尙ほ明德を發現するには『天』の觀念を要す、卽ち『天道』を敬するなり、而も天道とは非人格的に云へば公道、人格的に云へば上帝である。中庸に

大哉聖人之道。洋々乎發育萬物。峻極于天。

と言つてあるが、聖人の道は洋々として大海の水の涯りなき如く、その中に一切の物を容れて生ひ育てゝ行く、而して根本には峻として天を極め、卽ち天地の公道に基き天命に依つて居る又孝經にも『孝は天の經地の儀民の行なり天地の經儀にして民之に則る』べし』とあるが、天地には不易の常經があり、人としては子は親に孝をすると云ふ秩序が定まつて居る、人道は天道の秩序に基いて行はるゝものである。中庸に、

使下天下之人齋明盛服以承祭祀。洋々乎如在其上如在其左右。

と云ふ、儒教に於て孔子の祭典をするが、實は孔子は儒教の傳導師であつて、儒教の基く所は天道である、卽ち天下の人をして天道を祭らしめなければならぬのである。

この天道が人生に顯れては仁義の道德となる、仁は萬物を生々化育し、義は萬物その宜しきを得ると云ふ節に當るを云ふ、中庸に周公の德を讃して次の如く言へり、

肫々其仁。淵々其淵。浩々其天。

周公が人民を惠み愛しんで行くことは肫々として親切が行屆いて遺る所なく、精神の方も物質の方も周到なる慈愛が現れて居るが、斯樣な大德はどこから得たかと云へば、淵々として深き淵よりして溫き德性が備はり、又浩々として高く廣大なる天の德を得て以て我が德とし、これを一身に體現して來たから、周公のやうな大德が現はれたと云ふのである。こゝに注意すべきは若し親切が秩序を失ふと惡平等の博愛となつて來る實にそこがむづかしい問題である、それを解釋したのが儒教の『義』である。

親親之殺。尊賢之等。禮所生也。

『殺』は『降殺』などと云ふ熟字があるが、段々少しづゝ殺ぎ減らして行く意味である、例へば親に盡した精神を紙十枚とすれば、兄に盡すときは紙七枚とし、その隣り

の人には三枚とし、又その隣りの人には二枚とする風に、段々秩序に從つて愛を減らして行くことである。それから賢を尊ぶの等で、賢者を尊ぶにも等差階級がある、世の中の偉人を尊ぶにも、その等差を忘れてはならぬ、少し優れた賢者があつたからといつて、聖德太子よりも、孔子よりも、釋迦よりも豪いやうに言つてはならぬ。

孝經の中に『其親ヲ愛セズシテ他人ヲ愛スル之ヲ悖德ト謂ヒ、其親ヲ敬セズシテ他人ヲ敬スル之ヲ悖禮ト謂フ』

と言つてあるが、その親愛する秩序を紊る場合には、その德は全きものでない、これは儒敎の長所であります、德川時代に於て儒敎が勢力を得たのは此點からであらう、今日でも儒敎が國民道德と合するのは此點である、儒敎は此點のみならず、尙ほよく一致する點がある、我國には忠孝の倫理と同時に、又堂々たる世界大の理想がある、

天業ヲ恢弘シ、天下ニ光宅スルニ足ル、蓋シ六合ノ中心カ。

一方には忠孝を心とし、一方には世界大の理想を發現して行く、恰も兩翼の如く兩輪の如く、少しも缺けない所のものである、然るに此精神を忘れて大理想を輕く見るならば、今後の發展に就て見るも、又建國の精神から見るも、確かに誤まりである、これが大事な點であると思ふ。之に就ては少し岐路に入るが迂遠ならざるを證明する爲めに、孟子の說を少しく紹介したいのである。

孟子の四の卷に於て、楊子と墨子と子莫とを駁して居るが、

『楊子取爲レ我拔ニ一毛一而利ニ天下一不レ爲也。墨子兼愛摩レ頂放レ踵利ニ天下一爲レ之。子莫執レ中執レ中爲レ近レ之、執レ中無レ權猶レ執レ一也。所レ惡レ執レ一者爲ニ其賊一道也。擧レ一百也』

卽ち楊子は『爲我』、墨子は『兼愛』、子莫は『執一』であつて、當時楊墨の說が盛に行はれ、諸侯は楊墨の說に耳を傾けて居つた、所が楊子は爲我で一毛を拔いて天下を利することをも爲さず、又墨子は兼愛で等差無しの惡平等に傾き、子莫は中を執り爲我と兼愛の間を取つて、個人主義と博愛主義の中を執る主義であつたが、それを孟子

が駁擊して居る、中を執ると云ふは聖人の道に近いやうではあるが、權がない、權とは權衡であつて重い輕いを量り、重きは重く、輕きは輕くやつて行くのである、唯一その中を執ると云つて一を執るのは、窮屈固陋の思想に捉はれ、その宜しきに從ひ、物の輕重に應じて節して行くことを知らず、これは道を賊ふものであると言つて駁して居る。そこが非常に大切の事であつて、仁義と云ふ根本の思想より發して、その宜しきに應じ、夫婦の間にも、兄弟の間にも、社會にも、宜しきに從つて發現して行かなければならぬ、「義」と云ふのはさう云ふ意味で、義は宜しきに從つて物を量り、百目は百目、一貫目は一貫目と云ふ風に現はして行くことである。故に社會主義を排斥して居ることも矢張り此意味から出て居るので、許行の言つた事に對しても、痛快なる駁論を加へて居る。

有爲神農之言者許行自楚之滕踵門而告文公曰遠方之人聞君行仁政願受一廛而爲氓、文公與之處其徒數十人皆衣褐捆屨織席以爲食

陳良之徒陳相與其弟辛負耒耜而自宋之滕曰聞君行聖人之政是亦聖人也願爲聖人氓陳相見許行而大悅盡棄其學而學焉。

陳相見孟子道許行之言曰滕君則誠賢者君也。雖然未聞道也賢者與民並耕而喰饔飧而治今也滕有食粟府庫則是厲民而以自養也惡得賢。

孟子曰許子必種粟而後食乎曰然許子必織布而後衣乎曰否許子衣褐許子冠乎曰冠曰奚冠曰冠素曰自織之與曰否以粟易之曰許子奚不自織曰害於耕曰許子以釜甑爨以鐵耕乎曰然自爲之與曰否以粟易之以粟易械器者不爲厲陶冶陶冶亦以其械器易粟者豈爲厲農夫哉且許子何不爲陶冶舍皆取諸其宮中而用之何爲紛紛然與百工交易何許子之不憚煩曰百工之事固不可耕且爲也然則治天下獨可耕且爲歟有大人之事有小人之事且一人之身而百工之所爲備如必自爲而後用之是率天下而路也故曰或勞心或勞力勞心者治人勞力者治於人治於人者食人治人者食於人天下之通

義也(ナリ)』

今日で云へば一種の社會主義であるが、許行といふ神農の言を爲す者があつて、楚より滕に行きて住し、その徒弟數十人あつて、皆毛織の粗末な著物を衣(キ)て履を捆(クム)ち席を織りそれを市に持ち行き賣つて食物を得て居つた、詰り勞働生活を營んで居つたのである、所が陳良の弟子陳相が滕に行き許行に會つてその說を聽き大に感服して、陳良に學んだ所を棄てゝ、許行に學びて、歸つて來て、孟子に會つて許行の說を話した、許行の說は平等生活である、賢者は民と竝び耕し、自ら田を作り、又饔飧卽ち朝夕の食事を自らして食ふやうにして、世を治むべきものであると言つて居る、然るに今滕の文公は賢君ではあるが、まだ足らぬ所がある、卽ち倉廩府庫があつて民の物を取り立て民を困しめて、己の奉養とするやうでは、どうして賢者と言へやうと、非常に跨り顏に陳相が述べ立てたのである、今日で云へば許行の主義は無政府共產主義である。所が孟子が聽いて非常に憤つて、それは怪しからんことであるとて、陳相に反問して段々問ひ詰めて行つたのである。孟子曰く『然らばお前に尋ねるが許行と云ふ男は自ら粟を種えて而して後に食する乎』陳相曰く『左樣であります』孟子曰く『それでは許行は布を織つて後に著物を衣る乎』陳相曰く『それは致しませぬ』『許行は褐を衣て冠を冠つて居る乎』陳相曰く『冠を冠つて居ります』孟子曰く『何を冠つて居る乎』陳相曰く『素を冠として居ります』孟子曰く『それは自ら織るか』陳相曰く『いえ自分の作つた粟と交易して居ります』孟子曰く『許行は何ぜ自ら織らないのか』陳相曰く『それでは耕すことが出來ませぬ、耕す方に時間を要しますから、織る遑がございませぬ』孟子曰く『許行は釜で飯を焚くか、耕すに鐵で作つた道具を使ふか』陳相曰く『左樣であります』孟子曰く『その釜や鐵の道具はどうして得たか』陳相曰く『粟を以つて交易します』孟子曰く『それでは他人を苦しむることゝなるでないか、他人の作つたものを取つて使ふと云ふことになるでないか』陳相曰く『粟と易へますから差支ありませぬ』孟子曰く『けれども許行の主義が一切自分でやつて行くと云ふことであれば、

鍛冶、陶工、織物等一切自分の手でやらなければなるまい、己れが用ゐる物は悉く自分の家の内で作つて、之を用ゐることを爲さず、何故に紛紛然として諸の工人と交易するのか』、陳相曰く『百工のする仕事は耕作の餘暇ではできませんから、交易して用ゐるのであります』孟子曰く『百工の事は耕した餘りに爲すことが出來ぬと云ふか、然らば天下を治むる者に限り獨り耕したり天下を治めたりしなければならぬと云ふはどうか、さう云ふ事が果して出來ると思ふか、若しこれのみが出來ると云はゞ、甚しき妄論であらう。世には大人の事と小人の事とがあり、大小各〻爲す所がありて、兼ぬることは出來ぬものである、一人にて百工を兼ねんとせば天下の人皆路するとて、道路にウロ〳〵して安心が出來ない、安宅を得ない、故に人を治めて心を勞する者は君となり、人に治められて力を勞する者は民となり、さうして心を勞する者は人に養はれ、力を勞する者は人を養ひ、互に相俟ち相助けて行くのが天下の通義である、聖賢が天下を治むる精神上の勞苦、なかなかに百姓が耒耜を把つて田を耕すやうなものでない』と論じ、それより堯舜禹の德をたゝへ、禹が水を治めて洪水退き土地平らぎ、百姓が心を安うして農作することが出來るやうになつたことを述べ、『禹が水を治むる爲め外に在つて奔走して居ること八年、三たび其門を過ぎつたが忙しさに門内に入らなかつたと云ふ位であるから、かゝる場合には如何に耕さうと思つても耕すことが出來やうぞ』と言ひ、又『百畝の易ならざるを憂とするは百姓の事で、天下の憂を以て憂とするのは聖賢の事である』と痛言して居る、又『吾聞用夏變夷者未聞變於夷者』即ち『野蠻を文明に進むることは聞いて居るが、文明を野蠻化することを聞かぬ、許行の言ふ所は文明を夷狄に變へやうとするものである、それいふ事をしたければ、夷狄に行つて蠻民の中に居れば宜い、さすれば許行の言ふ如き事が行はれて居る』と言ひ、又『吾聞出於幽谷遷于喬木未聞下喬木而入於幽谷者』と論じ、惡平等の精神を駁擊し盡して、頗る壯快を極めて居る、仁義の道を說くことに於て孟子の言は實に至れり盡せりである。

此仁義に由つて理想の國家を成すのである、儒教には一方に禪讓放伐と云ふやうな斷じて採用の出來ぬことがあるが、それは支那の歴史の關係から來たのであるが、半面には理想の國家を主張し、『不仁而得レ國者有レ之矣、不仁而得レ天下一者未レ之有一也』と云ひ、仁政を行はずとも小さい國は得られるけれども、天下を得るには仁政でなければならぬ、事を天下に成さんとする者は不仁の政では往けない。山鹿素行先生なども武士道の中に『大丈夫の志』を説いて、『武士は兵馬の力のみでなく、一面に立派な理想を有しては居らねばならぬ』と言つて居る。孟子の中に曾西が『功烈如レ彼其卑也爾何曾比二予於是一』と言つて覇道を斥けて居る。

社會政策の事も儒教には存して居る、聖賢の道は迂遠なりと云つて笑ふ人もあるが、その基礎となる理想があれば物に應じて變化して行くことは難くはない、仁政と云ふに社會政策を行はなければ仁政はない。中庸に『小德川流大德敦化』とあるが、我が國體がそれである、『德ヲ樹ツルコト深厚ナリ』と云ふのも、大德である故に日本の國民性には一方に大德性を有し、それが宜しきに適して特殊の國民性と成り、中外に施して悖らざるものでなければならぬ、所が孟子が言つて居る、『天下有レ道小德役二大德一天下無レ道小役レ大』で、立派な國家が成立つて立派に秩序が立つと、小德は大德に從つて働くが、若し天下に道無きときは、小德は大德に役せられず小は大を役するとになる。

右は儒教の尊い所であるが、儒教の缺點として禪讓放伐易性革命の採るべからざるは勿論、儒者は多く包容寛大の量を缺き、深遠なる思想を排斥し、心靈の事を論じても固陋の見解を脱し得ないのである。

（六八）佛教思想の概觀

次に佛教の事を少し述べやうと思ふが、是は自分の專門の事であり、その長所を數へ立つれば餘程多いのであるが、茲には極くその大體に止む。

深遠なる哲理に於て佛教は卓越して居る、儒教も御國體の精神を説明するものとし

て尊いが、その事柄とその精神を最もよく說明するものは佛敎である、殊に我建國の狀態は單に科學の知識を以て說明の出來ぬ穆々たる意味がある、御國體の哲理を說明するには佛敎が最も適して居る。

又佛敎には『佛性』の說がある、儒敎で謂ふ明德を更に哲學的に明かに言つたものである。

それから『實相』の說は天地宇宙を解釋する上に於て卓越して居る、これには『不變、隨緣』の思想が偉大なるものである、『不變眞如、隨緣眞如』の『相卽』を說き、此思想が大原則を成して居るから、少々の變化があつても、その變化は相卽の理に違はず、彼の進化の如きは隨緣で說明が出來る、斯樣に一方には隨緣の思想があり、一方には不變を以て一貫した思想があつて、互に相繫つて居る。然るに西洋には此思想が發達しないで、漸く近代に至つて一元哲學を唱へて居る。不變隨緣の思想は之を道德に應用しても、亦色々尊い意義が現はれて來る、時間で云へば古今に通じて變らぬ點があり、又一方には時と處と位置とに應じて行く。空間の方から云へば全體に亘りて同時に有らゆる方面に應じて居る。

軍人への御勅語を拜察するに五ヶ條は『一誠』を全うして五ヶ條と成り一誠が五ヶ條を貫いて居る、五ヶ條としては忠節、禮儀、武勇、信義、質素と仰せられて居るが、之を他の德目に見ても同じである、而してこの一誠を佛敎では信仰と謂ひ、儒敎では大德と謂ふ、此意味は個人の方面に持ち行けば、個人の良心を啓發する明德となり、之を家庭に持ち行けば家庭の道德となり、親に對しては孝、兄に對しては悌、夫婦に於ては相愛の德性となつて現はれる、又之を社會に持ち行けば國家に適應し、我が建國の事情歷史か云ふ社會性の公德が現はれ、國家に持ち行けば、共同生存とか博愛とはれ、宇宙に持ち行けば所謂天地の公道と合致し神を敬ふ心となつて現はれる、是れが卽ち相卽不離の關係である。此の中にも國家的の道德が一番大切のものとなるのは、

現在の文明に於ては、個人の理想目的を達するにも國家の力に依り、家庭の安全も國家の保護に依り、世界の文明も國家の貢献に依つて保障され、宇宙の德も亦國家の進歩に依つて明かになつて行くからである。人間の精神にはその中心となる所がなければならぬ、その中心は國家に置くべきであつて、曾て軍艦の組織を見たるに、司令塔の處に總てに命令する設備があつて、そこより命令すれば皆動くやうになつて居つたが、何事でも中樞がなければならぬ。或は機關が大切であるとか、水雷が大切であるとか、砲手が大切であるとか言つても、仕方がない。波を蹴つて進むときは機關が大切であり、近づいて敵を擊つときは水雷が大切であり、又遠方より敵を擊つときは大砲が大切である、何れも必要に應じて大切であつて、一概に輕い重いは云はれない、然かし之を統ぶる司令塔その中に居らるゝ司令官が一番大切である。之れと同じく道德の中心が忠君愛國に在るので、完全なる思想はこの不變隨緣の中から發現するのである、佛敎はそれを一切の原則として說明して居る、人一人にしてもその通りで信仰を中心として、一切の德を現はし、空間に於ては不變の道德、時間に於ては時、處、位の道德となつて現はれ、さうして遂に天地、國王、父母、衆生の四恩として示されて居る、これを大德は敎化すと云ふ所に入れて見ると、信仰と四恩と云ふことになるのであります。

それからモウ一つは『本佛』の說である、有らゆる尊敬すべきものと融合調和して進んで行く包容性があり、我國の神明と融合調和を示して居る。

又『菩薩行』を奬勵する上に、色々尊とき意味を含んで居る、儒敎で云へば『君子』、我國で云へば『ますらを』、と云ふ精神が、菩薩の人格に包容されて、大德を現して行くことを說明して居る。是等はその取捨宜しきを得て洗練して進んで行けば、確かに我國民の大理想を發揮して行く上に、立派な資料となると思ふ。

次に佛敎の弊害の事を少しく述べんに、それは誤つて惡平等に流れる點である、社會の秩序を破つて個人の絕對を主張するとか、又厭世的の思想に流れて現實を夢幻の

如くに思ふとか、又自分獨り悟り顔に天邊の月を眺めて、人生の事は是非共に意に關するに足らずとする獨善主義とか、斯う云ふ思想に溺れるのは惡い所でありますが、併し是等の惡平等、厭世、獨善の如きは佛敎を學び損つた者に起る弊で、佛陀は斷じてさう云ふことを本旨として居るものではありませぬ、佛敎の方便中に含んで居る事を、學び損つた人より導かれた思想である、儒者が佛敎に反對するのは、その弊害を見て居るので、その本質に對して反對したのではない。又今日の敎育者が佛敎に反對するのも、佛敎が厭世的であるとか惡平等であるとか言つて居るのであつて、健全なる佛敎は別である。

(七) 皇道思想の概觀

それから、皇道の心髓を拜察致しますると、前に述べました總ての點に對して之を制裁し、善導し愛護する德が含まれて居つて、個人に就ても個人の惡い所を制裁するのが皇道であります。個人の德は之を啓發し、家庭に對しても社會に對しても、萬事行き届きたる理想的の國家を立て、世界の中に相對的に一區劃を成すを以て甘じて居らず、世界の文明に貢獻し世界の文明を愛護すると共に、それには天地と合致したる公道を奉戴して行くのであつて、不變隨緣の義が我が皇室に於ては攝收洗鍊遊ばされて居る、卽ち神勅の天壤無窮、天業恢弘、天下光宅、皇孫養正の御精神が、明白に之を示して居るのである。

國の初に『思兼神』があらせられた、中朝事實には、

『蓋思兼神者、神代思學叡聖之神乎、思在レ兼、不レ兼則思有二臆說一、然乃思者、內致二其知慮一、兼者、外盡二其事物一也。』

思ふこと深く兼ぬること廣く、博厚、高明、悠久の意味を思兼神樣が統べ司つて居られる、或人は日本の國民は昔の神話時代の遺風に甘んずると云ふが、斯の如くに大理想に淵源して居ることを知るべきである。日本國家が成立つたのは決して無意識に

成つたのではなく、大理想があつて成立つたのである、『天業ヲ恢弘シ天下ヲ光宅ス』と言ひ、又『サカシキ國ハ平ゲク遠キ國ハ引キ寄セル』と云ふやうに立派な文明に仕上げて行くと云ふ精神を本として起つて居る。明治天皇の思召にそれがよく現はれて居る。皇祖皇宗の遺訓洪謨は神聖なるものでありますから、一時藩閥が起つたけれども、それは國體の精神に副はぬので、遂に廢滅して仕舞ひ、　陛下の御誓文に『舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ』『知識ヲ世界ニ求メテ大ニ皇基ヲ振起スヘシ』と仰せられしは、こゝに我國の理想が發現して居るのであります。我が國民にもこの堂々たる精神、包容的の雄大なる精神を逸してはならぬ、忠孝道德の特殊の色彩を世界に輝かして行くのは勿論である、益々これを發輝して行かねばならぬが、それと同時にこの偉大なる精神を養ふべきである。御製に、

萬つ民すくはん道も近きより
おして遠きに行くよしもかな

世界の民を救はんには、先づ我國をよく治めてそれよりおして世界を救ふやうにるとの意味に拜察し奉るのであります。

我が心およはぬ國のはてまでも
よるひる神は護りますらん

神代より承けし寶をまもりにて
をさめ來にけり日の本つ國

三種神器の靈德は世界的に輝くのである、その理想の實現の爲めに鏡、劍、玉の三ツのものがある、啻に家庭の道德個人の道德の爲めでなく、天業を恢弘する爲めに與へられたものである。

よもの海皆はらからと思ふ世に
なと波風の立ちさわくらん

國の爲めあたなすあたは碎くとも

いつくしむへきことなわすれそ

仁者必らず勇ありと云ふが日本人の理想である、又前に拜誦致しました『國と云ふ國のかゝみとなるはかり』の御製と云ひ、いつれも個人に對しても家庭に對しても世界に對しても、或は天地の公道に對しても、その理想が陛下の御製の中に含まれて居る、所謂『大德敦化、小德川流』の御德が周く備つて居るのである。それは神代よりの御靈德が陛下の御人格の上に顯はれたものである。陛下は臺灣の民に對しても仁愛を垂れさせられて『撫恤を加ふべし』と仰せられて居る、『臺灣ニ於ケル人民ノ撫育ハ朕カ深ク軫念スル所』と仰せられて、仁愛の御德を顯されて居る。

我國の思兼の神の思想の中には深遠なる哲理も、有らゆる道德上の意味も、總て包容されて居るので、不朽不變の國體を益々鞏固ならしむると共に、一面には世界的の理想として發現して行くのである、而してその中に有らゆる德は含まれ、細かい德はこの大理想より導かれて行くのであります。

國民道德

（一）意義

それで先づ初めに國民道德の意義と云ふことを少しお話して見たいと思ひまするが、是は倫理學の上に於きましては實踐の方面であると云ふことを殆ど確定したものの如くに總ての人が申して居ります。さうして其實踐の方面に就ては、我々人間として世界の一個人として實行しなければならぬ卽ち人道の側と、それから特殊の國家の一員として實行しなければならぬ卽ち國民道德の側と、此兩面が實踐倫理の上に存して居ると云ふことを申すのであります。而して其特殊の側に依りまする所の國民道德は實踐的の倫理としては狹いものでもあり、又淺いものであると云ふやうな意味の事を附加へて申して居ります。

然るにさう云ふ事だも考へないで、唯國民道德と云ふものは我々國民の全部の道德の如く考へて、國民道德以外に普遍的の道德あることを忘れ、或は普遍的道德を敵とし、さうして只管に國民道德を狹隘の意味に於て主張して居る者があるが、普遍的の倫理と特殊的の倫理との關係は、離すことの出來ないものである、併しそこが未だ判然して居らぬ。先づ國民道德の起る原因としては左の三つある。

第一は『境遇』に依つて生ずると云ふので、境遇とは、我國は地理の關係に於て大陸を離れて島國なるが爲めに、他の國々の影響を受くることが少く、國民の結合を養ふ素となり、其他色々の關係が地理の上から起るのである、或は天然の氣象の上から、或は溫帶であるとか、熱帶であるとか、又は寒帶であるとか云ふやうな事から、國民の氣風が生じて來る。又天然の關係から色々の植物が異なり、其植物か國民の食物となり、住居の組織となつて行く上に於て、樣々の氣風が生じ、そこに特殊の道德が顯れて來ると云ふ。古い學者は之を水土論と謂つて居る、是は水とか土とか云ふ字を用ゐて居りますけれども。今日研究さるゝ所の地理とか天然とか其他の境遇を指して論を立てたものである。

第二に數ふるは『國民の性向』である。是は境遇が本になつて起るのであらうが、其國に生れた人民が一種變つた民族の精神を養ひ來たるのである、其原因する所は矢張り境遇事情に基くものなるも、既に一種の氣風が發生すれば、夫れが親より子に傳へ、又其國民間に色々の接觸を起し、互に觸れ合ふ所に於て國民の性向が生じて來る、さうして或は極めて快活な氣風となり、或は實行的の氣風となり、又は勇氣となり、犧牲の精神となると云ふやうに、樣々の美風を生じ、又缺點をも生じて來るので、我國の國民に於ても無論多くの長所を有つて居ると同時に、亦短所も少からぬのであります。左樣な事を一々調べ、さうして國民道德の發生の原因とするのである。

第三に數ふるは『歷史』である、此歷史の成蹟として顯れたる事柄も、矢張り境遇なり性向なりが本になつて顯れるのであつて、その一旦顯れた歷史は、國民の精神に

反響して相依り相助け、以て性向に依つて歴史を作り、歴史に依つて性向を導き、燦爛たる日本人の氣風を作るに至つたのであります。其歴史の關係は三千年間統一的系統的の發達を遂げて、億兆一心の忠愛の觀念を釀成したのである。

この三つを主なる原因として國民道德が發生したと云ふのである、これには別段反對をする學者は無いので、國民道德は其國の境遇なり、民族の精神なり、歴史なりの關係に因つて、養ひ出されたる所の特種の美風を指して、之を國民道德と謂ふのである。併しながら退いて考へますると、其國民道德の意義は唯實踐の方面のみに限られて居るものであるが、もう少し廣き意味に於て、理論の方面と謂はうか理想の方面と謂はうか、尙ほ奥床しきものが根柢となつて、夫れが實踐の方面に顯れて居るものであつて、國民道德は實踐的のものであると、ハッキリ區域を仕切るのは、宜しくないかと思ふ。國民道德には理論と實踐との兩方面があり、其理論にも亦極めて深き根柢があると云ふことを明かにして行く方が宜くはあるまいか、又國民道德を單に特殊的道德と申しますけれども、日本の國民性の中に特殊の如くに現れて居る道德そのものが、夫れが亦直ちに世界的の普遍の道德になつて居り、更に同時に夫れが直ちに天地の公道に通ふて居りはせぬか、即ち殊特の中に普遍的のものがチャンと具はつて居りはせぬか、この點に新考察を要するのであります、是は特殊的の道德、是は普遍的の道德、是は宗教的の道德と云ふやうに、切り離すことの出來ぬ所があると思ふのであります、詰り『殺人劍は即ち是れ活人劍』と云ふ語がある如く日本國民は武勇の精神の半面に、直ちに仁愛の精神を有つて居る。さうして戰ふと云ふ精神中に救ふと云ふ精神を有つて居り、又國を擁護すると云ふ精神中に世界を導くと云ふ精神を有つて居るのでありますから、特殊の事柄に注がれて居る精神が、總ての普遍的全體の精神を、そこに集中して來て居るものであると見るには、もう少し融通の取れる考へを以て見た方が宜くはあるまいか。併し是は重大な問題でありますから容易に斷定は下せませぬが、兎に角今日定義されて居る國民道德の意義に就ては、餘り遽かに信じて、それ

で宜いと極め込むことは宜しくあるまいと思ふ。之を廣くもし又深くもし、さうして盛んに國民道德と云ふ意義を膨脹させて行くが宜いと思ふ。餘り狹く區域を定めて、是は國民道德であり、是は普遍的道德であると限り、倫理の法則を敵とし、宗敎の信仰を敵とし、或は世界の文明を敵として、只管に國民道德を養はなければならぬと云ふやうな頭を有つて居るのは、今迄の日本國民としてどうか知れませぬが、今後の發展進取の國民道德としては相應しからざるものであると考ふるのであります。

(二) 考察

普通に唱道せられて居る國民道德と云ふ意義に滿足しないと云ふことは、國民道德そのものを嫌ふが爲めに、又之を卑しむが爲めに、言ふのでなければ、學者の說を嘲けるが爲めに、言ふのでもない。國民道德を尊重するよりして、之を鞏固にし、之を深遠にして、益々力あるものたらしむるが爲めに、考察するのであります。或人は國民道德の意義を狹隘に定めて、普遍の道德や深遠の宗敎を批判し、彼は不忠の者である、彼は宗敎の爲めに呪はれて居ると云つて、之を一概に排斥して居る者もあるが、さう云ふ狹隘固陋の考が、我國に盛んに行はるゝのは、甚だ不祥の事で、嘆はしき次第であります。無論私共の見る所も、國民道德は國民道德として、益々鞏固にして進めて行かなければならぬと思ふのでありますが、一層その意義を根柢の堅實なるものとして、熱誠を喚起せしめ、各種の思想との融合統一を希ふに外ならぬのであります。

そこで『特殊的に顯れる道德と、普遍的に顯れる道德との關係』でありますが、夫れはどう云ふ關係が起るかと云ふに、之を實踐と云ふ上に於て考へますれば、近きより遠きに及ぼすと云ふことになつて參りますから、無論この部分的のもの、特殊的のものを先と致しまして、全體のものを後にすると云ふことは爭ふべからざることであります。近きより遠きに及ぼし、卑きより高きに登るのであつて、先づ直接の關係を有する處より出發すると云ふことになるのであります。單に實踐と云ふことだけを考

へまするとと、何よりも特殊的の國民道德をやれば、それで宜しいと云ふ風に考へられますけれども、實踐の根柢となる人間の德性の發現致しまする順序を考へまするとと、三通りの見方があらうと思ふ。

（甲）實踐上よりの見方

（乙）德性發現と實踐との關係よりの見方

（丙）實踐と理想との關係よりの見方

德性發現の順序を考察するに、天地の公道若くは宇宙の正氣と云ふが如き偉大なるものに、接觸しなければ、眼を覺まさせ難いのである。この根本を覺醒せしめずして只適應のみ言ふは不可なり。故に『德性の發現と道義の實踐との關係』を考ふる時は、餘りに特殊の方面に偏しても行くまい。

更に『道義の實踐と高遠なる理想との關係』を考ふると、事實やつて居る事は部分的の事、小さい事をやつて居つても、其理想は全體と通ふ所の闊大なるものでなければならぬ。例へば一水雷艇の司令なり若くは其中の部分的の職務を執つて居る者としても、其人は一水雷艇だけを動かして居るのみではなくして堂々たる帝國の干城を以て任じなければならぬ、假令其執る仕事は部分的であつても其理想は國家の干城と考ふべきである。然るに只水雷の事する故に、他に理想がないとすれば海軍軍人の本分を全ふする事は出來ませぬ。實際やつて居る事は部分的であつても、夫れか直ちに大理想と通ふて居ることが大切である。されば德性の發現から考へても、又實行と離るべからざる理想から考へても、その特殊の事を實行するに當りては、德性の全體と遠大の理想とを以て、導かれて居らなければならぬ。是れは決して一の小さい考へではない。よく〳〵考へて見るとこれは古今東西を通じて、文明を進めて行く一定の方針であらうと思ふ。それに就ては井上（哲次郎）博士が國民道德概論中に、斯う云ふことを言つて居らるる。

倫理學を建設する以上は矢張り西洋の倫理學者の考へと東洋從來の道德の考へとを

併せて建設して來んければならぬ、所が今までではどうも充分夫れが出來て居らぬのであります。

この趣意は西洋の倫理學者の思想と、東洋の從來の道德との、兩方を適當に調和して、而して健全なる國民道德を築き上げなければならぬ、けれども今迄の所では、どうもそれが充分に出來て居らぬと云ふことであります。穗積博士の『愛國心』の中に、西洋の事柄を述べられて居る所を見ると、矢張り同じやうな困難に遭遇して居るやうである、『愛國心』の終りに、

歐洲の近世の史跡を看るに、道理に由りて國を治めんことを欲し、宗敎を蔑視し信仰を放棄し、社會の大改造を試みたりし以來、百年の久しきを經たり、而して其の現狀は放棄したる信仰は再び回收すべからず、豫期したる道理の主宰は遠き未來に望むべく、現世に實行するを得ず、已むを得ず更に大に國民の負擔を增重し、兵力財力の强大を養ふて、威力を以て僅かに國法を强行するの制裁力となすに過ぎず。純白なる道理の世は尙ほ遠き未來に屬す、現世は尙ほ箇人も社會も信仰の力にて動く時代なり。故に社會啓發の要件に適合する、我が千古固有の國民的信仰を保持するは、人生進化の天與の武器を愛惜する所以たる者なり。

西洋の方では道理に依つて國家を組立てゝ行かうとしても、うまく行かぬので、今では兵力と財力とを養うて統御して居り、德政を以て統御して居るのではない。武力と財力とを以て漸く國家を維持して居るのである。卽ち信仰とか道德と云ふものを中心に置いて、國家を組立てゝ居るものでなく、若し騷ぐ者があれば武力を以て縛り、又啗はしむるに利を以てして、國民を結び付けて居るやうな有樣であると云ふことである。さう云ふ考へであるから、無論國民道德は充分に養はれないのは、言ふ迄もないことであるが、幸ひ我國には立派な國民的信仰があつて、民心を收攬して居るから、この國家に對する信仰を打ち棄てゝはならぬと云ふのであります。何れにしても西洋に於ても、大變に困つて居る有樣であります。

姉崎博士はこの問題に就て、深く研究されたやうであるが、斯う云ふことを言はれて居る。

近世の國家の狀態と云ふものは、唯だ生存競爭と云ふことが盛んになつて、金で國民を操つて行き、それ以上の理想がない、夫れが西洋の國家組織の狀態である……

尙ほ色々書いてありますが、近世の國家の狀態は道德でもなければ、信仰でもなく理想でもない。唯だ金で國民を操つつて行き、それで國民を統御して居るのが、西洋の有樣であると云ふことであります。

兎に角さう云ふ具合でありますから、西洋に於ても困つて居るのでありまして、我國に於ても色々の思想や學說と、國民道德とが結び付かないで困つて居る、併し幸ひ軍人中には、鞏固なる忠君愛國の思想が養はれて居る故に、將來國民の思想を導くことには、軍人諸君も大に努力するやうに望ましいのである。多くの中にはさうでない人もあるかも分りませぬが、私共の知つて居る人々は、皆立派な信仰を有つて居られる。

どうか國民道德に就てはよく徹底的に考察して、唯だ人眞似をして居るだけでなく、有らゆる研究を遂げて、その意義を明かにし、之を鞏固にして進むことが大切であらうと思ふのであります。

(三) 針路

國民道德と一般の道德、若くは宗敎の信仰、其他有らゆる文明の意義との關係を整ふるには、大體どう云ふ方針で進んで行つたら宜いか、細かい事は澤山あらうが、その大體を極めて見たらどうかと思ふ。

是はどうしても特殊と普遍とを充分に融合して、餘りそこに區域を付けない方が宜いのではあるまいか。前きに申述べし通り、どうしても實行は特殊のものに依り、近きより遠きに及ぶものであるが、德性發現の根本、倫理上の根柢、又は倫理上の終局の理想が、古今に通じて謬らず、中外に施して悖らず、所謂天地の公道とも通ひ、神

にも通ふだけの精神を有つて居らなければならぬ。實際に於ては忠君愛國の精神を中心として顯れ、親子夫妻の關係に於て顯れ、時、處、位に應じて顯れて來るけれども、それが常に大きな信仰理想と通つて居らなければならぬのであります。法華經に『小善成佛』と云ふ教義がありますが、是は愉快な理想で、小善卽ち小さい德に由つても佛と成ると云ふのでありまして、佛と云ふものは眞善美の完全を意味する至高善であります。佛教に於ては佛は絕對の悟りを成就したものとする、他人の爲めに同情をし、友人の爲めに忠實であつたと云ふやうな小善の中に、絕對の悟りを開く所まで通ふ意義があると教へてある。例へば一輸卒が一斗か二斗の米を脊負つて、山を登つて行くのも、又一軍を指揮して居る司令官も、形の上から見れば差別があるが、一誠と云ふ精神に於ては變はりはない。一輸卒の忠君愛國も、司令官のそれも變はりはない。總て社會は秩序を要するから、功勞と云ふことは差別があるが、忠愛一誠の精神の上から云へば、一兵卒も司令官も同一のものである、一方には階級秩序を重んじ他方にさう云ふ風に平等の德を認めて行かなければならぬ。

そこで唯今申す所の德性の發現若くは道德の理想は、いつも大きなものであり、根本的のものであると云ふやうなことは、之を儒教に就いて考へて見ると、最も此點が明かになつて居る。儒教にては一切の德を說明するに『仁』を以て說く。仁の內容は孔子が弟子に說いた所を見ると、樣々の意味があつて、唯だ親切と云ふ意味ばかりでなく、總ての人類を救ふ意味もあり、色々の場合に應じて色々の意味を有し、仁は博愛と云ふ意味のみにあらずして、其節に當ると云ふことが大切であるから、仁より義を說明することにもなつて居る、仁を本にして夫れから義も勇も出て來る、故に仁を理想としなければならぬのであつて、是は孔子が畢生の力を注いだ所であります。仁は我々の有つて居る明德の奧から顯れて來るので、それが天道と云ふ絕對の靈威と結び付いたものを大德と謂ひ。天道と明德とを說き、又大德小德と云ふて居る。小德を澤山積み重ねたら大德が出來るかと云へばそれは出來ませぬ、大德を養へば小德は

自ら生じて來る。部分を集めたら全體が出來るかと云へばさうでない、例へば木の枝を幾ら集めても、根幹がなければ木とはならぬ。然るに根幹があれば枝葉は自ら生じて來るやうなものである。故に舜が謂つて居る所の『惟ㇾ精惟ㇾ一』と云ふことも、其根本を充分に磨き上げなければならぬと云ふのである。或は『一以ㇾ貫ㇾ之』と云ふことも『一』とは『信』とか或は『忠恕』とか云ふやうな色々の意味があるが、『仁』と云ふ言葉を以て顯すことも出來るのである。或は『浩然の氣』と云ひ、『曰く言ひ難し』と云ふ、即ち至剛至大のものにして、之が發すれば樣々の德性となつて現れて來ると云ふのが、孔孟の學說であります。

故に發現の根本から見ても、終局の理想から見ても、實際やつて行くことは、相手に對して色々に現れて來るけれども、其の本は心の奧底なり天道なりに基づき、而して人類全體に及ぶのである。

我國の『皇道』……是は皇道と謂ふが宜いか、古神道と謂ふが宜いか、又は國道と申すが宜いか、兎に角色々の語が用ゐられて居るが、私共は常に皇道と云ふて居る。是は即ち『スメラギノ道』、言換ふれば『君道』であるから、臣民に關係が無いやうに聞えると云ふので、井上博士などは反對されて居るやうでありますけれども、私は『皇道』とは皇國の道として、皇道と云ふ文字を使つて差支ないと思ふ、我國の國の始めから傳はり來れる所の皇道は、大和民族の所謂『敷島の道』と稱して居る所の道であります……この皇道の方ではどうなつて居るかと云へば、矢張り其淵源は堂々たる『御靈德』或は『御稜威』の力と稱するので、それは決して部分的のものでなく、曰く言ひ難きものである。即ち至大至剛完全圓滿なるものを指して、御靈德とも御稜威とも稱し、或は樣々の字を用ゐて居る。例へば『至德』『玄功』『神德』『聖德』又は『俊德』とか云ふ字を使ひ、或は『深厚』『宏遠』と云ふやうな字が用ゐられて居り、其意を言ひ盡すことが出來ぬから樣々に謂はれて居るのでありまして、樣々に謂はれて居るのは單純なるものでなく含蓄的のものであり、普遍的のものであつて、言ひ盡すことの出來ない

ことを顯はして居るものである、その含蓄的普遍的のものが本になりて、我國の美風が顯れて來る、皇統一系も是より出で、億兆一心も是より出で、歷史の成蹟も是より發現して居る、而して大和民族はこの御靈德を奉じ御稜威を仰いで行くのである。されば國民は偉大なる御靈德に感佩し、堂々たる聖德に感激して、其宜しきに從ひ時と處と位置とに應じ、軍人は軍人として模範的の軍人となり、宗教家は宗教家として模範的の宗教家となり、又政治家は政治家として模範的の政治家となると云ふ風に、各々職務の上に世界的に模範的の光を發現して行くやうに心懸ねばならぬ。併しながら源に遡れば億兆一心と云ふ事も、皇統一系と云ふ事も、此穆々たる天來の俊德より來ると云ふことは、皇道の上より見て動かすべからざる意義であらうと思ふ。然るに今人多くは此靈德を力說せず、又靈德を本として諸種の德風の發現する所以を明かにせずして、『國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ』との勅語をも、形式的に說明し、何が宏遠か、何が深厚か、充分に解らぬやうである。卽ち道義の根柢が穆々として窮まらざる所に存して居ることを了解せずして、分解的の頭を以て『國ヲ肇ムルコト宏遠』と云ふのは、國の歷史が長いと云ふやうに解釋して居る。成る程我國の歷史は二千五百七十八年約三千年である、三千年と云ふ歷史は長いけれども、これは過去の歷史が長いと云ふことにのみ見るべきではなからう。『宏遠』と云ふ意味は肇國の精神が意味深長であつて、この精神を實現するには、宏遠悠久の時間を要する故に、之を將來に推し及ぼして考ふれば過去に於ける我國の歷史は日尙ほ淺しである。我國の國威國光を輝かすは事將來に屬する、皇祖皇宗の洪謨を奉體して考ふれば、我國の天職は所謂前途遼遠である、斯くて我國の深厚なる靈德聖德は限り無い意味を以て、宏遠に悠久に發現して行くのであります。

更に佛敎から考へて見ると、佛敎は無論此事を明かにして居るのであります。『信ハ爲レ道ノ元メ。功德ノ母ナリ』と云ふことがある、儒敎では『本立テ而道生ス』と云ふて居るが、皇道では『一誠』と云はれて居る、之を佛敎では『信仰』と云ひ、この信仰

が一切の道を生ずる根源となり、一切の道德を生み出す母となるのであります。この明德なり佛性より發現した信仰がなければ、正大なる道は得られない。故に先づ以て信仰を得よと云ふので、所謂『發菩提心』と云ふことを敎へる、『菩提心』とは包含的の心にして、儒敎の『仁』も頗る包含的であるが、佛敎の『菩提心』程ではない。佛敎に於て『菩提心』と云ふは、非常に宏遠の理想で、慈悲であるとか、妙智であるとか、決心であるとか、精進であるとか、其他樣々の意味を含んで居る。是が先づ出來上つて、それから學問となり知識となり、活動となつて顯れて來るのであつて、佛敎史を飾つて居る高僧碩德は、悉くこの發心より生まれたのである。この發心が誤つて居たら、何事も成就せぬと云ひ、信仰を尤も大切に敎ふるのである。其他諸種の方面から德性發現の重大なるを證明することは出來るが、堂々たる德性の發現と、宏遠なる理想とを以て、時と處と位置とに應ずるので、信仰を基として其部分々々に應ずる道德行爲を、導いて行くやうに敎へて居るのであります。

次に其督敎はどうかと云へば基督敎に於ても『信仰』を本とし、而して一切の道德が發現して行くと說くので、基督敎にも色々美しい道德が現れて居るが、それは皆この信仰から實行されて行くので、さうして其理想は頗る世界的であり、宇宙的に顯れて居る、彼が國家の組織と觸るゝ所があるのは缺點であり、佛敎も餘り超絕的の精神に過ぎては、國家の組織を輕視するに至るが、彼の宋儒己下の學者や古神道に僻した學者のやうに、宇宙的、世界的の堂々たる精神を棄てゝ行くと云ふやうのとは宜くない。要するに昔から狹隘なる理想に局蹙し、宇宙的世界的の大精神と融合して居らぬものと、時、處、位に適應する國民道德の眞精神を閑却せるものとが、一知半解の頭で喧嘩をするのである。どちらも出來損ひと云はなければならぬ。故に双方が反省して包容統一の主義に依り、特殊の道德と普通の道德とを併行すべきである。

又西洋の倫理學はどうであるかと云へば、矢張り同じ傾向を示して居り、或は『內舍的目的』とか其他色々の言葉で表はされて居るが、是は人間の心の中の立派な理想德

性よりして人の行爲は導かれて、有ゆる道德が發生すると云ふので、一切の道德は我が良心に有つて居る內含的のものに導かれて行く、其堂々たる內含的のものが眼を覺まさなければ、倫理の根據が無いと云ふことを推し詰めて、さうして之を『直覺的功利』と云ふやうに言つて居る。直覺的功利と云ふのは、自分の心の外から得た切れ〳〵の經驗や知識に依るものではなく、先天的に有する良智良能が一時に眼を覺ますとで、それが直覺的の働きで、それからして總ての働きが發現して來ると云ふのであります。或は『自我實現』と云ふやうなことを云ふが、言葉を換へて謂ふまでのものであります。『自我』は『明德』と云ふことに當るが、之を瞬間の自我に見ると、自我は物欲となつて非常に害を爲すのである。例へば個人主義とか自己中心とか云つて、己れを本にして行くときに、この瞬間の自我、物欲の自我を押し立てれば、恰も犬が交尾期に互にいがみ合つて居るやうなものとなる。小さい心に起る刹那の自我、瞬間の自我を押し立てゝ行けば、社會國家の大害を成すのであります。故に良心の中にある最も大なる普遍我が眼を覺まして行くと云ふことが、倫理の根本となつて居るのである。

そこで儒敎でも、皇道でも、佛敎でも、基督敎でも、西洋の倫理でも、皆同じやうに德性發現の根據、宏遠の理想は、堂々たるものを先きにするのであります。そうして之を特殊の所に當てがうて行くことになつて居る。先帝陛下の御製に依つて、此の意味を確めますると、私の拜察致しましたる所では、能くこの意味をお示めし遊されて居ると存じます。

萬つ民すくはん道も近きより
おして遠きに行くよしもかな

萬つ民と申されたのは、世界の人類を指して居らるゝので、それを救ふには、一遍に救ふことは出來ないから、先づ近き處の我國民を導き、それより段々遠きに及ぼして行く、卽ち國民の團結を鞏固にし、國威國光を輝かし、進んで廣く萬民を救ひたまふ御聖旨である、實行は近き處に於て先づ行はれるが、理想は遠く萬民を救ひたまふ

にある。

我こゝろおよはぬ國のはてまても
よるひる神は護りますらむ

祖宗の御仁愛は世界の萬民に洽く及んで居るので、この神明の思召に從つて、總てを惠む心を闊大にしなければならぬと仰せられたので。國民も斯の觀念を有つて居らなければならぬのである。又

眼に見えぬ神にむかひて恥ちさるは
人のこゝろの誠なりけり

と仰せられて居る。之に就ても教育家は如何に考へて居るのであるか『信義』の『まこと』と『至誠』の『まこと』とを混同して居る者がありはしないか。軍人に賜はりたる御勅諭を拜讀しまするとゝ、五ヶ條中の『信義』と云ふのも『まこと』でありまするが、併し『一誠』と云ふ『まこと』が五ヶ條を包容して居るのでありまして、一の誠心が無ければ五ヶ條は何の役をも爲さぬと云ふのは、矢張り堂々たるものが本になつて其中から諸種の德行が活躍して行くことを示されたのであります。又

くもり無き人の心を千早ふる
神はさやかにてらし見るらむ

神明照覽ましますと云ふ信念に立たねばならぬのである、眼に見えぬ神の心に通ふやうに、我が心を清くし我心を磨き上げなければならぬ。堂々たる誠心を持ち神樣が照覽されても、恥ぢない精神を有つて居らねばならぬが、それが人の心の誠である。即ち『眼に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ』である。そこが所謂『神人合一』でありまして、我心が神の心に通ひ、神の心が我心の下ると云ふことになるのでありります。佛教に於ては之を『入我。我入』と謂ひ佛我に入り、我佛に入ると云つて居ります。之を器械的に云へば『舜何人ぞ我何人ぞ』と云ふ意味で云ふこともありますが、本當の精神的の意味では我と佛とは天淵の差がある、けれども信仰から申せ

ば、我心が佛に上つて合し、佛が我心に下つて合すると云ふことで、神と我とは霄壤の別があるが眞心に於ては神の心我心に來り、我心神の心に通ふと云ふ所から、偉大の確信が起つて來るのでありまして、『我は天地よりも大なり』と云ふ確信が起るのであります。古來の賢君名將は斯う云ふ精神に基づいて居られる。殊に　明治天皇の御聖德は有らゆる方面に互つて居らるるが、矢張り此精神から有ゆる德が發現したものと思ふ。決して區々たる科學の研究や、瑣々たる學問に依つて發現したものではありませぬ。矢張り古聖賢の立てたる堂々たる道德を、昭々乎たる靈德に照らして、さうして仁愛となり、武勇となり、賢明の德となり、有らゆる德となつて顯れたものと仰ぐのであります。

斯の如く考へ來りますると云ふと、我國の國民道德は、特殊的のものが本となつて居るのではなくして、一般の道德、世界人類がやつて居るやり方と同じ事をやつて、その中に秀麗なる特色異彩を放つやうになつて居るのである。孔孟の道も、佛敎も、基督敎も、西洋の文明も、又神ながらの道も、　陛下の御聖言も、皆この大理想を發現して、之を導いて行くことになるので、こゝに宗敎の信仰と合し、こゝに國民道德の根據がある。然るに一概に宗敎の信仰と國民道德とは相容れぬと考へ、或は國民道德と普遍的の人道とは衝突すると思ふのは、一種の謬見であります。今より遡つて考へますれば、今少し夙く宗敎と、道德と、學問とが融合して居つたならば、我國の敎育などにも、もつと闊大の精神が顯れて居る筈であります。然るに德川時代の朱子學を學んだ亞流と、復古神道に僻した人達とが、高遠なる佛敎を敵とし、普遍的の人道を顧みず、只だ古に復すと云ふ狹隘の意味が、延いて今日の國民道德の理想を狹隘にしたものではなからうか。

要すに大體の著想をさう云ふ事にして、段々研究を積んで行つたらどうであるか、それに就ては、先づ國家觀と國民道德との關係に就て、申述べて見やうと思ふ。

(四) 國家觀

國民道德の眞意義を明かにするには、先づ以て國家に對する理想を明かにしなければならぬ、即ち國家觀にして堅實ならば、國民道德の見解も亦自ら明かになる次第である。口を開けば輙ち國民道德を說く人々にして、却つて狹隘淺薄なる國家觀に安んずるの傾きがある者がある。故に先づ國家觀と國民道德との關係を見、更に他の諸種の思想と國民道德の關係を見やうと思ふ。

學者の見解に依ると、色々の國家觀が現れて居る、加藤(弘之)博士の國家觀は强權說である、加藤博士は强者の權力を說き、『强いと云ふことが權力である、强いと云ふことの外に權利は無い。早く云へば叩き付けで勝つ者が權利を有つて居るのであつて、それが生存競爭である、法律でも宗敎でも金でも、皆背後には腕力が控へて居り、强力が本になつて居る。其の强力が皇室に集つて居りて、我が皇室は强力の中心となり、何者をも叩き付ける力を有つて居られる、故に萬民が之に服するのは、之に服せなければ叩き付けられるからである。彼れ此れ言へばひどい目に遭はされるからである。我國の尊嚴なるは强權が充實したるが爲めであつて、詰りさう云ふ具合にして、國を造つた方が國家に都合が好い。强權を集中した方が國民團結の爲めに都合が好い。所が我が國は都合好く强權が皇室に集つて居る。』と云つて居る、して見れば都合が惡くなれば變へなければならぬと云ふことを含んで居るのである。故に或る人は之を御都合主義の國家觀、便宜主義の國家觀と謂つて冷評したが、加藤先生は今でも田舍の敎育家や學者の中には、なか〳〵受けが好く、勢力があつて、加藤博士の言つた事や書いたものは、眞理なり定則なりと思つて居る者がある。去りながらこの說は明かに我建國の事實に反し、國體の靈威を傷つくるものである、別に駁擊を加えずとも、後の國家觀によつて自らその謬妄を知ることが出來るのである。

次は『君民同祖說』であります。我國の國家は、君と民とが祖先を同一にして居り、

民族の團結と云ふことの爲めに、我國家が出來て居ると云ふ說で、之を『總合家族制』と謂ひ、『個々の家族が集つて總合家族制が成立つて居るので、卽ち皇室は總本家であらせられ、我國家は人民相集つて國を立てたのではない、家族の總本家があつて立つて居るのである、祖先を同じうするよりして國家が成立つて居るのである』と云ふことを言つて居る。是は井上博士も穗積博士も言て居り、文部省側の人は概して此說を唱へて居ると聞く。所が我國家の事實と理想はさう云ふ所から來て居らぬ。歷史を見ても我國の祖先は決して家族を一にして居らぬ。色々異つた部族があつて、夫れが神孫民族の威德に心服して家來となつたので、丁度今の朝鮮が我國に合せられ、臺灣が我國に併はせられたと同じく、祖先を一にして居らぬものも、聖德に服して來たのである。又將來世界の人類にして聖德に服するものもあらう、故に總合家族制の如き說を以ては說明が出來ぬ。例へば朝鮮に持つて行つても、斯の如き國民道德說では面白くなからう。

次に芳賀博士は『感激的の情に因つて成立つたとする說』であります。是は『國家は別に何の理窟もなく自然的に成立つたものので、唯だ感激的の情に因つて出來たものである』と云ふのであります。一方に國家の主權は人民の機關である公僕であると云ふやうなことを、法律學者などが言つて居るので。近來の思想界を見ると隨分不統一であり、尊嚴の意味は少しも無く、『主權は公僕なり』と云ふやうなことを、遠慮會釋もなく言つて居る、そこで感激說は其反動として起つたかと思ひまするが、我が國家は理窟で成立つたものでない、感激したる情に因つて成立つたものであると云ふ。皇室の靈威に對して、何とも云へない敬慕の精神が起つて、それが忠となり、又孝となつて顯れて來たものであつて、そこに純粹の犧牲の精神が顯れたものである。決して自己を主にして理窟を考へたやうな所から、我國の國家は出來たものでない。法律學者が我國の過去を取り離し、皇室を取り離して、國家を說明せんとしつゝあるのは、非常に謬つて居るので、是は正しく西洋かぶれの思想である。西洋では國家は個人の利

益の爲めに組織し、個人を本位として國家を立てたものであるから、個人の爲めにならぬ場合は國家は破却しても構はぬと云ふ考が伴ふ。けれども我國はさうでない神孫の御德に感激したものが集つて、之を造つて居るのである。其の御德のことは芳賀博士は別に說明して居らぬ。唯だ感激の情と云ふものが國家を成立する根據であるとして居らるる。所でザッと考へて見ても、感激の情と云ふことも。一の原因とはなつて居るが、我國の國家は何の理想もなく只感激して、起つたものではない。大いに深い理由がある。決して盲目的に何の理想も無く、感激したと云ふだけで此國が出來たものではありませぬ。兎角學者は何か一ッ據り所があるとそれを捉へ、直ぐにそれに依つて一切を說明しようとするが、是は近來の學者の通弊であります。

我が國史に思兼の神樣のことがある、是は天照大御神が、大事があるとか又は難しい事があると、思兼の神に向つて「よく此事を考へよ」と仰せられ、丁度今日で云へば樞密院のやうな神樣でありまして、思兼の神がよく御考へになつて復命することになつて居る、其事に就て山鹿先生は、『思フト云フコトハ內ニ智慮ヲ致スコトデアリ、兼ヌルト云フコトハ外ニ事物ヲ盡スコトデアル』と言つて居られる。又

『此間有ニ力行一有ニ累積一有ニ近本一有ニ遠徵一有下建ニ諸天地一質中諸鬼神上』

建國の理想は感激の情からばかり來たものではなく、卽ち智慮を致し、事物を盡して建てられて居る、智慮深き所より起つて、實行の力となり、其の力行が積み累ねられて、段々立派な德が養はれ、さうして夫れを養ふには近本あり、遠徵ありで、近き我國の事柄に本づくこともあり、遠く世界の事柄に徵することもある。例へば海軍の人が海軍の事を調べるにしても、支那の七書や我國の水軍の事を研究して近本の道を調べ、更に遠く歐洲の軍事を調査するが如くにし。更に進んではこれを天地に建てこれを鬼神に質すと云ふ所まで行つて居るのである。我國はこの深謀遠慮を經て建てられたものである。決して一個の情のみに因て成つたものでないと說かれて居る。此事は大いに注意して考へなければならぬ。『建ニ諸天地一質ニ諸鬼神一』と云ふやうなこと

は、多くの學者は考へて居らぬので。『近本』とか『遠徵』とかの中の一ッでやつて行かうとするから、我國の堂々たる建國の意義が明かにならぬのであります。

＊　＊　＊　＊

以上は國民道德に關して、(一)國民道德の意義、(二)考察を要する所以、(三)正當なる針路と云ふ三點を述べ、(四)に移つて『國家觀と國民道德』に就て少しく說いたのである。其の中には國家の主權を强力にありとする說と、人民の機關であると云ふ說と、それから家族的の意味に於て、卽ち君民同祖なりと云ふ說と、又單に人民の感激した情卽ち感情に基すると云ふやうな說を以て、我が國家を解釋して居る人があることを述べたのであるが、尙ほ此外に幾多の國家觀が現代の學者に依つて主張されて居る、それが分裂して殆ど適從する所を知らぬ有樣になつて居る。國民は口を開けば國家が大切であるとは云ふが、其の國家に對する觀念理想に至りては、頗る分裂して居るのである。又多くの人は淺薄にして狹隘なる思想を以て、我が國家を觀て居るのではないかと思はるゝのであります。

これより續いて現代人の諸種の我が國家觀を述ぶべき順序なるも、今聊か各國に於て說明せられて居る所の國家の起原、國家の目的に就いて、申述べたいのである。此事をこゝで述べざれば、我が國體の眞意を見る場合に、思想の透明を缺きはせぬかと思ふ虞があるからである、故に國家學上に於て解釋する所の『國家の起原と目的』に就て開陳するのである。

(五)　國家の起原

(イ)　天命說

先づ第一に數ふべきは『天命說』であります。是は又神權說と謂つて居るが、此の思想は羅馬帝國が亡びて基督敎が勢力を得し後、法王の政治を布くに至りて、國家の主權は神の許しを得て始めて生ずと主張し、一國を支配する所の權能は人と人との間に

は生ずるものにあらずと云ふのであります。此の思想は長く西洋の諸國を支配し、今日に於ては此の思想は捨てられたるも、併し此の思想と現今の國家思想と孰れが優れたりやとの義は、今尚ほ問題として存する次第である。此の說の主眼は政權を行ふ者は固より人なれども、其の權利は神より來たりしものであると云ふのであります、若し此の神權說が、造物主が人間の性質中に國家の組織を生み出すべき萠芽を與へ人間が社會的本能を有するに依りて國家が出來たと云ふことならば、それは別に大なる差支もないけれども、基督敎に謂ふ思想はこれと異なり、人民を支配する主權は如何なる場合に於ても、人間の有する所にあらずとし、神の有する權利を一時與へられ、代つて行うに過ぎずと爲す、人が人を支配することは絕對に無いと云ふことが根柢となつて居る。それが爲め國王の其の位に卽かんとするや、必ず先づ基督敎の僧侶の手を煩はして、冠を戴かせて貰ひ、神の權利の一部を代表する所の許しを受くる儀式を行うて、こゝに始めて國王となるのであります。斯かる基督敎思想より來たる天命說は、

無論今日の國家主義の上に採用せらるべきものにあらず、故に西洋諸國に於ても此の思想を打破つて、近世の國家組織が起つたのである。卽ち宗敎革命と云ふことは一方には宗敎敎義の改革であつたけれども、他方には此の神權說を打破つた革命であつたのである。併しながら天命說の意義を、西洋の思想に依らずして、孔子の主張する所の天命說に依るとすれば、其の意義が違つて來る、それは支那の國風の禪讓放伐と云ふことを生じて來る。其の根柢には國王は天命を享けて、天の精神に愜ふ所の德を行ふ場合に於てのみ、政を行ふことが出來る、若し天の德を行はない場合には一匹夫である、故にこれを滅しても宜いと云ふやうな精神が起る。されば我が國體から見る時は、孔子の說は採用するを得ないのであるが、これは仔細に研究を要する點であります。天の德を享けて地上に實現することが、國王の第一の本領であると云ふ精神は、普遍永久の眞理であるかも知れない、是は審諦に考へなければならぬことである。天の德を行うて居るか、行うて居らぬかと云ふことを、人民が勝手に相談をして、是は

天の德に背いて居るから一つ革命をやるが宜からうと云ふやうなことを言ひ出し、若くは己れの志を行はんが爲に、己れ自身が天の德を享けて居ると言つて、取つて代るやうなことをやれば、さう云ふ事は最も恐るべき所である。けれども王者は常に天德と合することを考へて居る精神は、決して惡い事でない。易姓と云つて國王を變へて行く所の事柄が、我が國體と一致せないのである。國王は天の德を以て立たなければならぬと云ひ、王道を以て國王の生命とすると云ふ意義は、神聖なるものである。孔子は春秋を作つて周の王室の爲めに大氣焰を揚げ、どこ迄も周の王族を中堅にして支那の國家を永久に保つようにしたいと云ふのであつた。この點は孔子の精神に大いに同情すべき所があり、尊い點があると思ふ。

我が國體の淵源に溯つて見るも、天命の思想が有る、勿論支那の天命說や基督敎の天命說とは違つた意味であるが、後に至つて開陳することにする。

（ロ）契約說

第二に數ふべきは契約說であります。是は十七世紀の終り頃から十八世紀に掛けて起つて來た思想であつて、詰り民主的の思想である、國家は人民を本位として見るべきものとし、人民の爲めの國家であつて、國家の爲めの人民でないと云ふことが、原則となつて居る。此の思想の根據は人類は無限の自由を天より與へられて居り、隨つて人類は世界中に在る總ての物を領有する自由を有すと爲し、そこに激しき競爭が起り互に奪ひ合が起つて來る、其の奪ひ合を適當に制裁して行く爲めに、約束を結ばなければならぬ、其の約束が法律となつて顯れて來る、其の法律を實行して行く機關として、そこに國家の必要が生じて來ると云ふのが、民約說の原理であり此の法律を實行する機關の中心として、一國には主權が必要であるとする、其の主權は要するに人民の機關である。人民の利益幸福を保護する機關として國家は出來て居るので、其の國家の機關が三つある。それは元首と官吏と及び人民を代表する機關卽ち議會の三つが、一般人民の利益幸福を保護する機關である。何等尊とい意味を有つものでないと

云ふ。さうして一旦約束を結んで其の主權に對してそれだけの法律實行の權利を與へた以上は、之を人民が勝手に變へることは出來ない、最初の約束の精神に悖る場合に於ては、其の權利を解除して宜いと云ふことを主張するのが、ルソーの說である、又一旦與へたる權利は何等の事情があつても、之を解除することの出來ないものであると云ふことを主張するのが、ホツブスの說である。尙ほ此の外に約束は違はないでも人民が委托して居るものであるから、約束の通り實行しても、人民の方の考次第で何時でも廢して宜い、何時でも主權は人民の都合にて自由に動かせると云ふやうな、極端なる思想を持つて居る人もあるのであります。さう云ふ思想から現在に於ても政治上の自由を盛んに主張する者が起つて、社會主義とか無政府主義とか云ふものが唱へられ、今日既に國家の組織は害が有つて益が無いと云つて、國家の存在を不必要として居る者さへある。それ等は皆民約說の中から流れ來つた所の危險思想であります。まだ其の外にも原因がありませうけれども、此の民約自由の思想が流れ込んで、遂に國家に對する思想を危險ならしめたことが多いのである。我が國民に自由思想を吹込みたる演說や、文章を仔細に調査して見ますれば、其の中にも不穩當の言論が多々あるのであります。併し西洋の說に醉うて居る頃には、民權と云ふことは大したものゝやうに思うて、それ以外には何もないやうに考へたのである、今日になつて餘り吹込み過ぎたと云ふことに、氣が付いた者もあるやうでありますが、まだ醒めないでその方向に走らんとして居る人もある、それが爲め今でも田舍に居て法律などを少し嚙つた者の頭には、民權と云ふことは絕對の眞理のやうに思うて居る、是は國家は人民の契約より生じたるものであり、總て人民の爲めの機關に外ならぬと云ふ說の迷信者である。

（八）家族說

第三に數ふべきは、國家は家族を推し擴げたに外ならぬ、故に家長が有つて居つた權利、卽ち家族を支配して居つた權利が擴大せられて、國民を支配する主權となつた

と云ふのである。故に或學者は『國とは家族の二字を特筆大書したるものなり』と云つて居る、卽ち家族と云ふ字を大きく書けば國と云ふ字になると云ふことであります。此の思想が我が國體を說明する場合に、多くの學者が採つて居る所の君民同祖說であつて、之を色々の名に依つて論じて居るに過ぎぬ。井上(哲次郎)博士は『家長政治』、穗積博士は『血統團體』、加藤博士は『族父政治』と云つて居るが、これ皆同じものである、この說が我國には勢力がある。個々の家族とそれから總合的家族制度があつて、我が御皇室は個々の家族の總本家であらせられると云ふ說を以て、そこに家長權が君主權に擴大して、君主權が起つて居ると云ふのであります。併し此の思想は我が建國の精神に合致せざるのみならず、全く事實に背いて居るのである。後に先輩の說を紹介する時に、此の思想の缺點は自ら明かになるであらう。決して我が國は家族政治を以て國體として居るものでない、勿論さう云ふ思想も幾分か國民間にあつて、親しい意味合を以て進んで居るが、それは我が國體の眞相から云へば附屬性であつて、決して本體ではない。

(二) 征服說

第四に數ふべきは征服說である、是は强力を以て他の民族を壓迫し、さうして其の領土を奪略し、それに依つて國家は起つたので、自分の住んで居つた處から、自然に發生進化して、國と云ふものは斷じて出來ないと云ふ、先づ他人の土地を奪つて起る、卽ち腕力を以てし、武力を以てし、暴力を以てして他を叩き伏せ、さうして其の領分を自分の方へ奪略した時に國家が發生する。それをやらぬ限りには國と云ふものは出來ない。部落社會と云ふものは有るけれども、國家の組織體は生じて來ない、どうしても他を侵略した後に國は起ると云ふのであります。是は社會學者が社會學を研究する上に於て、盛んに論ずる所であつて、世界中の國の起原を悉く此の一說を以て說明せんとする。世界に國は多しと雖も、此の原則に洩れるものはないと云ふことを、非常に强く主張するのであります。我國でも社會學を研究した加藤(弘之)博士なども、

強力是れ主權なりと唱へ、如何にしても此の思想から脱出することが出來なかつた、成程それにも一個の眞理は存して居るので、國家を組織するにはどうしても威力を要するは勿論、國が起る場合にも、國を維持して行く場合にも、又國を發展させる場合にも、威力と云ふか、武力と云ふか、腕力と云ふか、此の一の力が常に伴うて居らなければならぬから、先づ國の起る最初には、半面から眺めたら、さう云ふ強力威力が伴うて居たに違ひない。けれどもそれだけを以て國家が起つたと思ふのは確かに謬つた思想である。我國に於ても國を定め給ふ場合に　神武天皇が東征せらるゝに方りては、或は聖德に依りて歸服した者もあり、或は威力に依りて征服された者もある、其の威力に依つて征服した一面のみを考へれば、征服に依て家が起るものとも云へやうが、それは我が國の成立を一局部より見た思想であつて、全面を達觀した思想ではない、局部を以て全面なりとするは確かに誤謬である。然るに世界の多くの社會學者は、殆んど皆此の見解を取つて居るので、彼の有名な社會學者スペンサーは斯う云ふことを言つて居る、『簡單なる成長のみにて種族が國民になりたる例は、一もなし』と。これは他の國と爭鬪せず奪略をしないで、同一民族だけで成長して行つて其の民族が國家に成つた例は一もないと云ふのである、また『勝者法を定め敗者之を受く』と云ひ、卽ち勝つた者が法律を定め敗けた者がそれに服從して行くと云ふ、此の勝者敗者と云ふ關係が起らなければ、國の體を成さぬと云ふことを申して居るのであります。それから此の思想を攻擊する方の學說としては、單に武力を以て征服するのみにして、其の被征服者に對して溫い意味を有たない場合、仁愛の精神、道德の精神なくして、奴隸として敗者を支配するだけでは、それは國家と云ふべきものでない。苟も國家を組織して居る以上は被征服者に對しても相當なる道德的の考があるべきものである、單に武力を以て威壓しただけの關係を以ては、決して國は出來るものでない。丁度人間が他の動物と區別の付くのは、そこに道德的の性格が顯れて始めて人間の資格が出來るやうなものであつて、若しそれが顯はれなかつたならば動物と擇む所はない、それ

と同じで社會の威壓的武力のみを以ては、國家は成立たぬと云ふのであります。併し斯う云ふやうな兵力を以て國を成した處も廣い世界には有るから、征服說も或國家には當嵌まる思想でありませうが、斯かる思想を以て我が國を解釋することは斷じて不可である。然るに加藤博士のやうな位置に居た人が、强力是れ主權なりと云ふことを、遠慮會釋もなく公言せられたのは、洵に嘆はしい次第であります。

（ホ）必要說（歷史說）

第五に數ふべきは必要說でありまして、是は人間の文明が進むに隨つて、歷史的に發達する所に、國家と云ふものが起るので、人類の發達に伴うて必然起つて來る所の組織機關であるが故に、これを必要說とも歷史說とも云ふ名を付けて居るのであります。人間が適當なる發達を遂げやうとする場合には國家の組織を要するものである。故に簡單に申せば國家は歷史的創造であつて、是は人類が社會に生活をして行く上に於て、不斷の向上を辿つて居り、絕えず進んで行く考を有つて居る、其の不斷漸進する所に、國家は成立つので、決して天命に依つて國家が起つたの、人民の契約に依つて國家が起つたのと云ふ譯のものでない。抑〻契約などと云ふことは、人間の知識が餘程進んで來て、そこに壓制政治などが起つた後に、反抗的に起るものであつて、國が成立つてから以後の革命の上の事である。國家は人類の歷史的必要より出來たものであると云ふ。此の說が一番穩かであると云ふので、近來の進步したる國家學者は、多く此の說を採つて居るのであります。

（ヘ）心理說

第六に數ふべきは心理說にして、これは歷史的發生說と同じやうな意味ではあるが、歷史的發生說の方は人間の文明を外界より見て說明したものであり、之を主觀的內含的に觀れば、人間の性質の中に國家を造る所の性能を有つて居ると云ふべきである。アリストテレースは『共同生存』と云ふことを言つて、人間は政治的の動物であり、共同生活を營む所の動物である。相依り相助けて行く所の人間の心理が、社會性若くは

共同生存の心理と云ふものであつて、其の心理が發現して行く場合には、どうしても國家的の組織體を造らなければならぬのである。さうして此の國家を成すに至つたのは、人間の性質の中にある個人性が、既に社會性と云ふか、共同性と云ふか、其の廣い所の人道に力を合せて進んで行く所の、大きな精神に降服したのである。個人が個人本位で社會に存在することが出來るならば、國家は生じて來ないのであるが、個人だけでやり切れず、個人の力だけで出來ない事が、世の中に多いから、そこで共同力を要する、共同力を以て個人の利益なり個人の幸福なりを進めて行く爲めに、こゝに國家が生じて來たつたのであつて、其の時には最早個人性が社會性に降服して居るのであると云ふ。是れ亦近來の學者が認むる所の說であります。是は心理學に根據を有し、卽ち人間の心性に根柢を置きたる學說でありますから、最も有力の議論となつて居るのであります。

以上六種の思想、天命說、契約說、家族說、征服說、必要說、心理說が、國家學の上に於て說明する世界各國の起原に關する思想であり、大抵の學者は此の中の二つ或は三つの思想を以て國家の起原を說明して居る、或は天命說、契約說、歷史說を採つて居る者があり、或は天命說、征服說、契約說を採つて居る者があると云ふやうな有樣で、此の六つを列擧して見るやうになつたのは、餘程國家學が進步して、色々の學者の說が綜合されて來たのであります。大體國家學に於ける國家の起原は此の六つの思想を了解すれば、西洋の學說も皆此の中に含むことになるのであります。……是が我が國の國家觀卽ち我が國體を觀る場合に、如何に關係をして來るかと云ふことは、此れより後に至つて述べんとする所である。

（六）國家の目的

（イ）個人本位說

此の說は、國家を組織して居る目的は、個人の爲めに設けられて居ると云ふので、

卽ち前に述べた民約の思想が國家の起原であれば、隨つて國家の目的は各個人の爲めであると云ふことになるのであります。此の思想は十八世紀の佛蘭西に起つて、さうして今では歐米諸國を風靡して居る思想であります。故に西洋人の頭にある國家の目的は、何としても個人本位と云ふことを打ち消す者はないのである。基督敎の思想も矢張り個人本位の思想である、そこで歐米にては國家の目的も個人本位、宗敎の敎義も個人本位であります。夫から出た西洋文明の思想が滔々として日本に流れ込んで來て、日本の思想界が個人主義の影響を受くるのは止むを得ぬことであります。法律は矢張り此の國家の目的を果たす爲めに出來て居るものであるから、西洋の法律は個人本位の法律である、それを法律學者が承け繼いで來て、日本に於ても其の法律を學生に敎へ、其の法律を學んだ人が役人になつて、到る處に要路を占めて居るから、どうしても個人本位の思想が盛んになるのである。然るに我が國民道德を說く場合にはそれではいけないから、忠孝が道德であると云ふ、こゝに人民は正しく衝突したる思想を與へられて居るので、それが爲めうまく解釋が付かぬで、まご〳〵するのでありますが、それは無理ならぬことであります。

（ロ）天命順行說

是は天の命に順つて行ふと云ふ思想であります。國家の存在して居るのは神の思召を行ふ機關として存して居るのである。國家自身の目的があるのではない。神の精神を地上に實現する爲めに、天國を地上に來らしむる爲めに、國家は出來て居るのであるから、國家の第一の仕事は神の有り難い意味を人民に取り次いで行くべきである。故に信仰なり道德と云ふことに付ては、國家が全力を擧げて保護しなければならぬと云ふ。是は旣に述べし如く西洋の中世紀に基督敎徒が羅馬を滅し、法王政治を布いた時に發した思想である。さうして一千餘年も長く法王の權力が國家を支配して居たから、そこで此の天命を行ふ爲めに國家が在ると云ふ思想が、餘程深く入つて居つたのであります。然るに十六世紀の宗敎革命以後に至つて此の天命說を覆へして、今度は

個人本位說を採るやうになり、個人本位の中でも近世の思想は、個人の利益を保護する爲めに國家は在るので、其の利益を保護すると云ふ中でも、人民の財產を保護する爲め、個人の富を保護する爲めに國家が存して居ると云ふ思想が固まつて來て居る。昔は神樣の思召を行ふ爲めに國家が在ると云つたのが、今は個人の財產を保護する爲めに、國家が在ると云ふことになつたので、どちらもその一方のみでは完全の說でないから、此の二つのを兼ね併せたる思想より成り立つのが、理想の國家なりと唱ふる人もある。

（八）法治說

此の說は有名なカントなどが主張したので、國家の目的は各個人に法律上の保護を與ふるにあり、法律を實行する機關として國家が存して居るのであつて、更に是れ以外の事を爲すのは皆無用の干涉である。國家は人民の間に協定せられたる法律を實行する場合に、其の實行を滑かにして行けば宜いので、それ以外に手を出したら越權の所爲であると云ふ風に、國家の權限を縮小して、法律を行ふ爲めに國家が起つたと云ふ說を取つて居る。

（九）人民保護說

是は國家は人民を保護すると云ふ一點に歸着するので、個人本位說に似て居るけれども、此の人民保護の爲めに國家が存在すると云ふのは、極く意味が狹いので、人民の生命とか財產とかを保護する爲めに存して居ると云ふので、矢張り法治說と同じく、法治說は法律を行つて往く爲めに國家が在ると云ふが、其の法律の內容を考へて見ると、人民の財產とか生命とか權利とか云ふものを、保護することを規定して居るのであるから、それに依て人民を保護する爲めに國家が存して居ると云ふやうな、狹い意味に取つて居るのが、此の人民保護說である。それ故少しでも此外の事に手を出すと干涉であるとか壓制であるとかと主張する者か出て來るのであります。

（ホ）公共幸福說

是は少しく意味が廣く國家の目的は一般國民の幸福を增進するにある、さうして其の幸福は單に物質上ばかりでなく、無形の事例へば音樂、美術、繪畫、或は公園を拵へると云ふやうな事も、總て國家は人民の享樂の事を手傳うてやる爲めに存して居るとするのである。人民の爲めに色々の設備を國家がして、公園を拵へるとか音樂堂を建てるとかするのは、人民の樂みをする娛樂の機關を設けるのであつて、勿論人命財產の保護もするが、重もに人間を面白く暮らさせる意味に於て、國家の目的は存して居ると云ふのであります。

（ヘ）人民制御說

是は更に意味が狹いので、唯一惡い人間だけを制御して行けば宜い、良い人民は別に世話をやいて構つてもらはんでも差支ない、けれども惡い者があつて良民の幸福を害する、それを國家の力で取り鎭めて呉れゝば宜いのである。それ以外に善良なる人民に對しては、別に干涉する必要なしと云ふ風に考へて居るのであるから、此の思想が段々進んで行けば、國家と云ふものは不必要であると云ふやうになり、西洋の社會主義のやうな所まで、進んで行くであらうと思ふ。

（ト）對外關係說

是は國內の事には國家の必要がない、唯一他國に對する場合に、交涉事件などが起つた時分には、人民が其の衝に當たる譯に行かぬから、人民を代表して外交上にさへ働けば宜い、內治の事は人民の自由獨立に任かして置いて差支ない、國家の目的は對外關係に於てのみ存すると云ふので、段々國家の目的を小さくして見て行くのであります。

（チ）國家實利說

是は國家を中心にして、國家の實利實益を計る爲めに存して居る、言葉を換へて云へば團體の利益を保證するを以て目的とする、個人の利益を無視する譯ではないけれども、國家の目的は個人の利益よりは、全體の利益を保護するを以て目的とするので

ある。故に國家の法律を作る目的は、個人の事を支配するよりは、其の國家の幸福、國家の實利、實益を增進することを目的として、法律は制定せらるべきものである。總ての法律は國を强くし國を進めて行く手段に設けられたるものであつて、國を忘れて人民の爲めに法律を作ると云ふことはないと云ふ。

（リ）　國家至上說

是は何ものをも國家の爲めには犧牲にして宜いと云ふ思想でありまして、國家なるものは人間の知識が最も進步したる上に生じて居るので、國家と云ふものは非常に高尙なる產物である。人間文明の中に於て最も高尙なる產物は國家である。故に國家と云ふものは尊敬しなければならぬ。吾々の感情を以て之を論ずるならば、非常に之を讃めて國家を拜まなければならぬ、それであるからして、個人に於てどれ程大切なものであつても、國家の用に立つる場合には、總て犧牲に供させて宜いものである。更に進んで云へば宗敎でも道德でも、又何ものでも、國家の爲めには總て犧牲にして、少しも躊躇することはない、國家が何ものよりも大事であると主張するのであります。此の中には無論一個の眞理を含んで居りまするが、併し言ひ方が癖がある。もう少し圓熟した思想で國家の絕對であると云ふ意味が、認められなければならぬのであります。

（ヌ）　理想的國家說

是は無論人民の幸福を保護すると云ふのも、國家の目的でありまするが、それと同時に道德の側に於て國家が之を培養して行く目的を有つて居るのであります。此の理想と云ふ中に於ても、其の道德を唯國を思ふと云ふ考、唯々國家觀念だけに見て行く思想もあり、國家觀念と併せて個人の道德、進んでは世界の人道を保護をすると云ふ、卽ち國家より見ては客觀的道德である個人的の道德、人道的道德を開發して行くと云ふ所まで、上ぼることが出來る。故に是は道德的國家觀であります。

無論利益幸福の思想も忘れては居らぬが、他の思想と異なる所は、乃ち國家的道德

を中心に置いて、それより個人的の道德、人道的の道德が進んで行くのである。國を思ふの道德を強くすれば、それに依て個人の品性は益々進められて行き、隨て世界の文明人道も此の國家に依つて、段々開發されて行くと云ふ風に、有らゆる方面を調和して國家が進んで行く、個人の德性も世界の人道も皆融和して進んで行くと云ふ所に、理想的の國家が存して居ると云ふのである。此の意味が充分に明かになつて居るのが、日本の國家の理想であると私は思ふ。國家至上說のやうに一概に有らゆるものを犧牲にするではない。場合に依れば個人も犧牲にするし、場合に依れば世界の人道を不問に置くこともありますけれども、根本の思想は道德的國家觀を中心にして、國家の力を以つて個人の德性を導き、又世界の文明をも進めて行く所の理想を以て立つて居るのが、日本の國家であります。そこで此思想を唱へた學者は西洋にもある、古く希臘のプラトーンの唱へた理想的國家は確かに參考になるものである、又ヘーゲルの道德的國家說も確かに理想的國家を說明する所のものである、此の思想を能く吟味し、此の思想を進めて行き、さうして我が建國の大精神に對照して、西洋の國家觀の健全な方面は採つて以て、我が國體の精神を發揮すべきであると思ふ。

或る人が論じて居るのに、

道義は宇宙に磅礴たる眞理にして建國の本義全く玆に存することを認識し之を信ずること愈〻厚く雄を五大洲に稱せんと欲せば主として道義の精神を發揮せざるべからず。

道義は宇宙に磅礴として存し、而して我が國を肇むるや道義を根柢として居り、それに依て國を建設したるものである。故に我が國が雄を五大洲に振はんとするならば、益々道德的の精神を中心として、國威國光を輝かさなければならぬと云ふのである。

又或る人は、

國家は道德を包含し之を統一する最高の善なり

と云ふてある。是は最高の善を發現する體制なりと云ふやうな意味であらうと思ひ

ますが、有らゆる德を包含し統一して、さうして其の最高の道德を實現して行くに、必要なる組織形體を成して居るものが、國家であると云ふことであらうと思ひます。

是等の思想はプラトーンの思想から起つて來て居るので、プラトーンは盛に理想的國家を說明して居るが、近世文明の國家は人民本位であり、而かも人民の利益本位であると考へて居つた所に、缺陷があることが分つて來たから、ずつと古い所の希臘の古代の思想に戻つて、國家の目的には理想がなければならぬ、道德的精神がなければならぬと云ふことに、復歸し來たのではあるまいか。

プラトーンは希臘の古い時代に出た哲學者でありますが、其頃に於ける希臘の國家は民心の結合が缺けて、盛んに個人思想自由思想が起つて來たので、之を見てプラトーンは非常に慨いて、眞の國家は個人が全體の爲めに結合して盡すと云ふことでなければならぬ。個人々々が互に分立した思想を抱いて、自己の都合を中心にして働くと云ふやうなことであつたならば、迚も完全の國家は成立しない。さうして國家はどこまでも國家自身の目的を道德に置かなければならぬ。啻に國家が道德を理想とするばかりでなく、國民の個々を總て道德的の人民に仕上げることを、國家の職分として居らなければならぬ。即ち國家の行動が道德を理想とするばかりでなく、國家の仕事は先づ以つて國民を道德的に仕上げることに力を注がなければならぬ。さうして斯かる理想の國家が働く時に於て、始めて個人が道德的の人となることが出來るのであつて、縱しや各個人が道德を理想として居つても、國家が道德を理想としないならば、到底個人の道德的生活は完成せらるゝものでない。個人々々の道德も國家の力に依りて始めて出來上がるのである。而して國家の道德理想は、丁度個人が道德的に敎育せらるゝのと同じく、例へば個人の敎育に於て智情意の三方面が完成されなければならぬと云ふことであれば、國家の道德も矢張り此の智情意の三方面が完成されなければならぬ。個人の道德を完成するのと國家の道德を完成するのとは、同じやうな意味合を有つものであると云ふことを論じて居る。……吾々の道德は精神的要素としては、

『智、情、意』の調和的高度の發達を指すのであつて、又『理性、心意、慾念』と云ふ字を用ゐて之を顯してもよい。

智――理性……聖知又は睿知
情――心意……勇氣
意――慾念……節制

正義

『理性』は知識を完就するものであつて、こゝに云ふ知識は今日の所謂科學的の知識を主とするのではない、孔孟の敎に謂ふ所の『聖知』とか又は『睿知』とか云ふ意味のもので、知識の中に道德的の意を含んで居る、佛敎にては之を『般若』と云ふ、此の德と合した知識が發達して行かなければならぬ。又心意の方に於ては『勇氣』、慾念の方に於ては『節制』と云ふ德が伴ふので、理性は人間の有ゆる働きを統一して行く所の德の中心と爲り、勇氣は理性を助けて外から來る誘惑に抵抗し、或は苦痛を恐れず、又は事に臨んで正しき判斷を與へ、徒らに死を恐るゝ卑怯の心が無くなる、知識に勇氣が加はつて働くとさう云ふ德が完成せらるゝのである。それから一方の慾念は人間の心から切り離すことの出來ないものであるけれども、之を獨立させて働かしたならば、邪の路に馳せ易いから、是は理性の支配を以て適當に導いて行くやうにしなければならぬ、此の慾念が理性に支配された場合に、節制と云ふ德が完成されるのである。さうして此三つが適當に調和されて、いつも此三つのものが充實した力を以て働く場合に、そこに『正義』の德が發現するのである。故に一言で云へば智情意の三方面の德が調和して高い意味に活動して行く場合を正義と謂ふ。それで人間が社會の共同生活をして社會を作るとか國家を作ることの出來るのは、畢竟此の正義の德を、個々の人間が養ふ場合に於て、始めて其目的が成就せらるゝのである。さうして共同團結の形を以て成立つのが一番良いのであつて、國家的組織を成したる團結を通ほして、始めて個人個人の理想道德が成熟するのである。此の國家的の結合體を通ほさずしては、到底個人の道德が完成せらるゝものでない。國家が完全なる形を成して、前きに言ふ如くに道

德を理想として進んで行く場合に、國民が眞實の德を成就することが出來るので、理想であつた道德が、現實の社會に顯れて來るのである。簡單に云へば理想の國家に於て、始めて人間の『至高善』が實現せられ、正義が實現するのである。理想と國家を切り離して、そこに正義とか完全なる道德を實現しようとするのは、空想であると云ふことを、プラトーンが論じて居るのであります。

此說は永久の眞理を含んで居る、今日進步したと自ら許して居る現在の學者の思想にも、此の一面がどこまでも伴つて居る。さうして我が國體の上には無論此の思想は根本より包含されて居ることを、忘れてはならぬと思ふ。故に是はプラトーンの說ではあるが、遠く希臘に居つて遙かに日本の國體理想を、景仰して居るものと見てよいのである。

ヘーゲルの理想の國家は、是も矢張りプラトーンの說と同じ傾きを示して居るので、人間の道德は自己の主觀的にある良心ばかりにては成就することは出來ない、儒敎には於ては道德は明德の發現であるとか、良知良能の作用であるとか云ふけれども、唯一人間を個人として置いて、其の有つて居る明德とか良心とか云ふものだけでは、到底道德が完成せらるゝものでない。己の外にある結合團體を通ほして、そこに秩序を保ち、其の團體の發達を理想として行く場合に、始めて人間の道德が成立つて行くのである、此團結から切り離されたる個々は、到底道德は完成しない。故に個人が家庭の中に入つて、團結を取るときには、家庭的の道德が顯れ、社會と云ふ團結を取るときは、社會的の道德が顯れ、國家の結合を成すときは、國家的の道德が顯れて來るのであつて、此の家庭なり社會なり國家なりと云ふ結合團體と切り離して、個々に分立することになると。そこに眞の道德は成立するものでない。さうして其の團結の姿、卽ち體制は、加何なる形の團結が一番大切であるかと云へば、家庭的の團結、社會的の團結と云ふものも貴いけれども、國家的の團結に至つて始めて吾々の理想の生活が出來るのである。故に國家を通ほさずしては個人の道德も完成しない、此の團結の完全なる形、

語を換へて言へば理想の國家が、人間個々をして此の人生に於て道德の生活を營ませ、個々の有する理想を實現せしむるのである。さうして其の國家の政體は如何なるものが宜いかと云へば立憲君主政體が一番宜いと論じて居る。

斯の如くにプラトーンでもヘーゲルでも、俱に國家は道德を目的として、さうして國民個々の人格も、國家の力に依つて道德的に仕上げて行くことを理想とし、隨つて國民の方よりも國家を擁護することに於て、始めてこゝに道德が完成せらるゝことになるので、此の兩方面が道德的に結合し、國と民とが結合すると云ふ所に、理想を築いて居るのである。是は確かに參考になると思ふ。さて前に我が國體に關する强權說、家族說、感情說等を擧げたが、今その續きとして他の說をも紹介しやう。

(七) 國體觀

(イ) 文明程度說

今の文明に於ては、國家的組織に依りて進むより外、總ての目的を達することは出來ない。個人の幸福も、世界の文明も、道德の理想も、總てのものが國家組織體の力に於て、完成せらるゝと主張するので、此說は穗積(八束)博士等の主張である。

人類の過去の歷史を考へて現在の有樣を見ると、世界の文明は國家的の組織構成を以て進んで行くことが、生存競爭の原則に適合して居る、人類が結合する所の中心點は國家に歸一するので、要するに今の世界は國家時代の世界である、國家の組織に依らずして今の世界に對抗して行き、今の世界に獨立して行くことは出來ない。然らば國家とはどう云ふ意味のものかと云へば、土地と人民と主權との三つの要素から成立つて居るので、一定の土地を領域とし、人民は其中に共同の團體を組立て居り、さうしてそれが唯一の主權に統治せられて居る所の、社會の形態を國家と謂ふのである。古今東西の歷史を大觀するに、時には國家組織を小なりと考へ、宗教を世界の中心に置き。而して世界の人類を統一せんと考へた者もある。それは理

想と云ふか道德と云ふか宗教と云ふか、形の方からでなくて精神界に於て、世界の人類を統一しようと考へた者がある。基督はそれである。又英雄が起つて國家組織を小なりとし、世界を武力の上に於て統一しようと考へ、大戰爭を起して有らゆる人類を自己の主權の下に降服せしめようと計つたけれども、それも遂に其の目的を達することが出來ずして終つて居るのは、今の文明に於ては、まだ世界を統一して事を行ふ所迄達して居らぬ。現今の人類進化の程度に於ては、國家の體制組織が生存競爭の要件に適つて居ることが明かであつて、簡單に云へば今の世界は國家時代の世界である、國家の組織を超えて、さうして精神の上かも世界を統一するとか、若しくは武力を以て世界を統一すると云ふことは、今の世界に於ては空想である。故に自分は人類の一人である、世界の一員であると云ふやうなことを云つて、愛國の精神を狹いものだと嘲ける者があるけれども、さう云ふ人は現代文明の程度を知らぬ人である。若しも今の文明に於て、さう云ふ懸け離れた事ばかり考へて居つたならば、其の國は遂に滅びざるを得ぬ。隨て其の人民の福利も失つて仕舞ふことになるから、今の文明に於ては人民の幸福を考へる上からも、國家の組織體制を鞏固にして、さうしてそれを通ほして進んで行くより外、現代に於ては空想たることを免れぬ。

是に由れば今の文明に於ては國家組織を必要とすると云ふので、別に異論の有ることではないが、併し少し思想の缺けて居る所がある。我國の建國の精神をば打ち忘れ、世界に有り觸れた國家を取つて說明すれば是で充分であるけれども、我が大日本國の建國の精神は、決して今の文明の程度にて國家を組立てゝ居るのではない、今の文明が進んでも永久に擁護しなければならぬ理想、寧ろ文明の最後の力となつて行くものが、我が國に存して居ることを確信しなければならぬ。我が國體は如何に文明が進まうとも、縱しや文明の終極に達するとも、寧ろ其終極の時に於て、我が建國の精神が世界に明かになるのである。今でも建國の精神の一部分は實現して居るが、其大部分

は理想として存して居るに過ぎぬ、その事は我が國體を考へれば直ぐ分るのである。此說も、我が建國の精神から充分に考へた思想とは云へないが、前に述べた主權は强力であるとか、主權は機關であるとか云ふ思想から見れば、餘程進んで居るのである。

（ロ）皇統一系說

是は普通に唱へらるゝ說で、文部省側の學者が常に唱ふる所である。井上（哲次郎）博士の『國民道德概論』中に論ぜられて居る國體說は、皇統一系其ものが國體であると主張して居り、先づ大體に於て日本國民全體が皆さう考へて居るのである、それは無論間違つて居る事ではないのでありますが、此の皇統一系と云ふ事と併せて考へなければならぬ事が在るのであります。

是は井上博士の『國民道德概論』中の『國體と國民道德』と云ふことを論じた章に、日本の國體は萬世一系の皇統を以て基礎として成立つて居る、萬世一系の皇統が基礎であつて、是に幾多の附屬的特色がある。丁度之を木に譬へますると、萬世一系の皇統は根幹の如きものであり、附屬的特色は枝葉果實の如きものであると云ふ具合に、相關聯して國體が出來て居る。

是に由れば井上博士の說は我が國體は皇統一系が根幹であつて、それに多くの附屬性の特色が附いて出來て居ると云ふので、その附屬性を七つばかり數へ擧げてある、それは大切の事でありますから、茲に併せて紹介した方が宜からうと思ふ。此の附屬性と根幹の皇統一系とが、關聯して國體が成立つて居ると云ふ點は大に注意すべきであります。

第一、『國體と政體との分離』是は吉田松陰先生が云はれた語にも『世態變遷すとも大義存す』と云ふことがある。日本の世の中の有樣が如何に變つても、我國の在らん限りは、忠君の大義と云ふものは永久に存して行くので、世態變遷すとも大義存す。國の政を執る形は時代に依つて變はつても、我國に於ても王朝の時代と、武家の時代と、それから立憲政治の時代とは、政治の形は變つて居るけれども、皇室を戴いて居

る國體は少しも變はる所がない、然るに歐米の國々に於ては、國體と政體とが常に同一の有樣で顯れて居るから、政體を變更する時分には、其國の根本迄も覆へして仕舞ふことになつて居る。我國に於ては政治の組織體制を變更しても、國體には關係を有つて居らぬ、是が世界に類の無い所の國家の組織である。

第二、『忠君愛國の一致』　君に忠なる所以が卽ち國を愛する事であり、國を愛する精神が君に忠なる精神に向つて進んで行くと云ふ事であつて、忠君と愛國とが常に一致して行く。我國にては左樣なことは申さんでも、國民自然の間にさうなつて居りますから、別段に特色とも思ひませぬけれども、世界の國々の有樣を見ますると、國を愛するが爲めに、時としては君に反抗することがある、國家を思ふが爲めに君主に向つて敵對した事が、歷史上に澤山顯れて居る。彼等の考へて居る國と云ふものは、個人思想民權思想などが主となつて、個人を基礎として國家を觀て居るからである。所が我國は全然それとは違つて居つて、飽く迄も億兆一心の德を明かにし、皇運を扶翼し奉ると云ふことが、國民の根本の精神になつて居る。故に『忠君卽愛國』で國を思ふの精神は直ちに忠君に向つて顯れると云ふことになつて居り、進んで云へば國と云ふことよりも、寧ろ君が先になり、君が國家よりも大なりと云ふことになつて居る。

第三、『皇室は國民に先だちて存す』　第二の『忠君卽愛國』と云ふ觀念は建國の事情から起つて居る事柄で、日本國の建國創業の當時、旣に皇室の力に依つて日本の國は開拓せられたのである、人民は皇祖が開拓せらるゝに從ひ、其の聖德に服して段〻集つて來たものであつて、人民が國を造つた所へ君主が現れたのではなく、君主の聖德に依つて國が開かれた時に、人民が歸依し渴仰して集つて來たものである。例へば僧侶や信者が集つて釋迦牟尼佛を作つたのではなく。佛敎、經典、寺院、僧侶、信者等、總て皆釋迦牟尼佛が現れて、其の德化に依つて生じた者である、幾ら信者が多くとも、如何に僧侶が多くとも、其中から釋迦牟尼佛が出て來ないと同じことで、我國の總ての事柄は、皇室の御威德に依つて成立つて居るのである。然るに歐米諸國は之と異つ

て、人民が國を拵へて居る所へ、或は武力を以て英雄が現れて來て之を奪略し征服して、それに君臨すると云ふ風になつて居るか、若くは人民が相談し合つて誰を戴くと云ふことで推戴することになつて居るから、奪略とか推戴と云ふことに依つて、人民より後に君主が現れて居る。故に時に依れば人民の力に依つて國が動かされることになるが、我國は全くそれと違つて居り、皇室は人民に先だちて居るから、皇室を戴かない以上は、我國は存することが出來ないのである。

第四、『祖先崇敬の美風』　是は萬世一系の皇統は祖先崇敬の精神と關聯し、祖先の血統を重んじ、其の血統を重んずることは祖先を尊敬することとなり、又祖先の遺志を重んじ、それを實現して行く本となるのである。即ち皇祖皇宗の遺訓を大切に思召して、それを遂行遊ばされるのが我が皇室の御仕事となつて居る、故に國家の大切なる儀式に於ても、總て祖先崇敬と云ふ事と關係して行はせられて居る、一年中の大祭日などは皆祖先崇敬の精神と、祖先の遺されたる思召を奉じて、國民の大祭日が出來て居るので、是は他國には無い事である。

第五、『家族制度の體系』　血統を承け繼いで來ることに於て、家族と云ふ精神が成立つて居るので、假令一人でも宜い、日本の家族と云ふものは獨り下宿屋に暮して居つても、内藤氏なら内藤氏の家と云ふ姓氏がある、是も亦他の國には無い。皇室の思召の方に遡つて考へまするとと、人民は悉く家族の如くに思召して、さうして之を統治遊ばされて居る。君臣の關係と同時に父子の如き關係が、皇室と人民との間に成立つて居る。故に人民も皇室を見奉ること、雷に臣民としての忠誠ばかりでなく、非常に温き情を以て見奉つて居る。現に先帝陛下御大患の時に、國民は二重橋に集り、誠心をこめて御平癒を祈願し奉り、身命を惜まず晝夜御祈り申上げた著さへあり、又崩御の時は父母を喪するが如き悲みを抱いて、涙にくれたと云ふものは、權力權威と云ふよりは、御仁德の中に家族的の温き意味が含まれて居る爲めで、斯かる美風は他國に於て、決して見ることが出來ないのである。

第六、『君臣の分定まる』　此事の最も能く明かに顯れて居るのは、和氣清麿の時の宇佐八幡宮の託宣であります。卽ち『開闢以來君臣之分定矣、以臣爲君未之有也。天之日嗣立皇緒』と云ふことがありますが、我國は國の開けた始めより君臣の分が明かに定まつて居て、如何なる場合にも臣を以て君とすることはない。故に武家時代に政治の實權は武門に移つても、決して御稜威をおろそかにすることは出來なかつたのであります。聖德太子の憲法十二條に『國に二君無く民に兩主無し』とあり、又上宮太子の姫宮の仰せられたことに『天に二日無く國に二王無し』とあり、中ノ大兄皇子卽ち後の天智天皇の仰せられたことに『天に雙日無く國に二王無し……』とある、この『民に二主無し』と云ふ思想は孔子も禮記に『天無二日、民無二主』と云つて居り、佛敎の涅槃經の中には『一佛境界無二尊號。一世界中無二轉輪王』とありまして、釋迦牟尼佛と云ふ一の尊とき佛がおはせば、阿彌陀とか藥師とか云ふ佛がその世界へ出て、渴仰の中心を奈る如きことはない。又一世界の中には轉輪王は一人しかない、決して二人の轉輪王があるべき筈がないと云ふことである。どうしても統治して行くには其の中心が立つて居らなければならぬ、君臣の分定まると云ふことは理想の國家としては最も必要の事である。支那などもさうありたかつたけれども、建國の本がさうなつて居らなかつたから、日本の如く君臣の分が明かでないのであります。……佐藤將軍の國防史論鈔中に『聖人孔子をして假に我神州の存在を知らしめたらんには、果して如何なる帝道を祖述せられたであらうか。抑もまた如何なる大歡喜を起し我が御國體を讃美せられたであらうか。若しも大聖釋迦をして我日域の人たらしめんには、果して如何なる敎義を以て我が王法を輔翼せられたであらうか。世界的敎法の我が王法と融和するを看て、如何なる大歡喜を起し、常住不滅なる轉輪王の現在し賜ふを感歎したであらうか』と云つてありますが、誠に其通りであらうと思ひます。

第七、『國民の統一體』　是は歷史的に古今を貫いて、我が國民が統一的事實を擧げ來つたことである。他の國から侵略せられた事もなく、又國民が今迄やり來つた事を

根本から革命したこともありませぬ。國民の風俗でも習慣でも、漸を逐ふて改善せられたと云ふことはあつても、國家の組織體が全く破壞せられたと云ふやうな、極端なる歷史を有つて居ないのである。上に皇統一系の皇室を戴いて居るが如く、國民の方も大和民族の精神が、ずつと歷史を逐ふて續いて來て居る。此の大和魂と云ふ精神が固まつて、それが破壞されずに持續して來て居るのである。元來日本は雜種の國民混成民族であります。其の混成民族は現在に於ても、六通り程あつて、臺灣を領土とし樺太を領分とした爲めに、日本は六種の異民族が我が皇室の下に屬して居るのであります。卽ち第一は支那人、第二は朝鮮人、第三は生蕃人、第四は「オロッコ」人、第五は「ギリヤーク」人でありまして、之に大和民族を合すれば六種となる。さうして此中に中心民族と云ふものがある。其の中心民族なるものは一に天孫民族と稱して、皇室に直隷し來りたる所の優秀なる人格を有する人民であります。全體の系統から申しますると、日本人の容貌なり骨格なり態度なりが皆違つて居る。けれども思想の方に於ては

は非常によく融合されて來て、大和魂と云ふものが中心を築いて居る。故に異民族と雖も天孫民族たる大和民族に同化されて行く、若し此の同化を誤つたら大變な事が出來て、國民の統一が破壞される。然るに歷史有つて以來、國民の統一が破壞されたことはない。今日では西洋の思想が流れて來て、西洋の民族が入込んで來た爲め、國民の統一が動搖することに付、思想界の事を心配するのであるが。併しそれも一時の現象であつて、將來は必ず此の統一體を適當に持續して行くに違ひないのであります。

以上七箇の附屬性と皇統一系の根幹とが結び看いて、日本の國體が成立つて居ると云ふのが井上博士の說であります。

是等の研究は無論異議を挿むべきものではありませぬけれども、我が國體の說明に就ては、或る重大なるものを逸して居りはせぬか。それは勿論御皇統に顯れて居る事柄が、我國の國體ではありますけれども、此の皇統の中に包含せられて居る聖德とか威德とか云ふ靈妙なるものを、說明することに於て缺けて居る。只今述べました所は

形の上からの説明であつて、もう一つ眼に見えない玄々微妙なるもの、是は何と申して宜からうか『靈德』と謂ひ『俊德』と謂ひ、樣々の意味で顯し得るが、一種微妙なる力が皇統に合して居る意味合を、十分發揮しなければならぬ。それは後の説を紹介致しますれば、自然明かになつて參りますから、玆に精しくは説明致しませぬ。

（八）　世界總攬説

此の名は假に私が付けたものでありますから果して當つて居るかどうか分りませぬが、此説の主唱者は筧(克彦)博士でありまして、『古神道の性質』と云ふ論文中に於て論じられて居るのであります。

我國の神ながらの道…是は『古神道』とも申せば『皇道』とも申し、或は『惟神の道』或は『臣道』或は『敷島の道』或は『大和の道』と云ふやうに色々の名を付けて居りますが、我國の建國當時から存在して居つた理想を指すのであります。之を『神道』と云へば何やら狹隘に考へられて一種の迷が起りますから、私は『皇道』と申すが宜いと思つて居ります。故に筧博士の言はれる『古神道』と云ふのは卽ち『皇道』であると見て行きたい。

此の皇道の精神は凝り固まつて動かないやうな意味合のものではない。非常に發展進取して行く所の活きた意味を有つて居る、國家を中心にして居ながらにして、世界と融和して行く妙體を有つて居るものである。丁度國民が一の國に屬して居りながら、世界の文明と衝突しないやうなものである。(國を思ふときは世界の文明を忘れ。世界の文明を思ふときは國を忘れると云ふやうな思想が、宗教家や教育家の間に窮屈に考へられて居るから、それを攻擊されたものであります)それで皇道の精神は皇道其れ自身で色々の事をしないで宜い、有らゆる教を總攬して行くに付ては、佛教は佛教をして改善せしめて行けばよし、基督教は基督教をして改善せしめて行つたらよい。是が古來より我國の皇道に於て取り來つた所の大方針であつて、決して妄りに手を下さない。若しも古神道を窮屈に考へて、佛教でも基督教でも是等を

排斥しやうとの考が起たら、それは非常の間違で、斯かる世界的に堂々と進んで來た、進歩したる宗教を排斥しようと思ふやうな者があつたら、大なる誤解であるのみならず、そんな事は全然不可能に終はる。何にしても人間精神に關する問題は、之を改めるにしても進めるにしても、時間を要する事柄であるから、餘程早く氣を付けて着々其の方針を立てゝ行かねばならぬ。困る事が出來てから遽かにまごつくやうな事をしても、それではいかん。事が起つて鼻を衝いてからではもう間に合はぬ、それ故に思想界の事は先見の明を以て、統一的に考へて行かぬと、始末におへない事になると云ふことを切論して居らるるのであります。更に進んで考へると我國の皇道には國民的の方面と世界的の方面とが揃うて居る。卽ち葦原の中津國(日本國)と云ふのは只出發點に付て之を中津國と定め給うたけれども、實は全世界に及ぼす中心としてお立てになつたので、我が日本國に實現して居る此の國民精神を以て、世界に推し及ぼして行き、世界人類をして一心統一の平和の生活を營ましめる所まで、伸びて行くのが我が皇道の意義である。さうして人類全般を漏れなく救濟する所まで、進んで行かなければならぬ。世界に類無き皇室を戴いて居ることは、今の日本民族のみの私すべきものではない。我が皇室は世界的の中心にお立ちになる御威德があるので、卽ち日本民族は世界の表現者として、此の世界の平和を維持する爲に、こゝに結合を取つて居るものであつて、世界の爲めに日本は存して居るのである。故に日本民族の內輪のみの爲に私を計るやうな卑しき料簡は、毛頭有つて居るべきでない。就ては日本民族が大自覺をなさなければならぬ事があるが、それは卽ち上にお立になる御方は、世界の人民に對して仁愛の惠を與ふると云ふことを御考へ遊ばされて、下たる人民は世界の總攬者で在らせらるゝ御方に對して、忠義を盡して行くのである。我國の御方であると云ふ爲に忠義を盡して行くのではない、又皇室の御德は『普遍我』と云ふ宇宙大なる意味と合體して居り、そこから出て寬仁大度の人格を有せられて居る。非常に汎い所の、卽ち宏汎なる愛と敬とを有せらるゝ

所の主體であつて、語を換へて言へば世界全體を統治さるる所の天皇であらせられる。此の尊とき御方を戴いて、世界の表現者として結合を取つて居るのが日本民族である。故に我々忠義の心を君に捧ぐるのは、世界の總攬者を今の日本の國民に依つて翼賛し奉つて居ると云ふことを、忘れてはならぬ。

是が筧博士の說の大體でありますが、此の中に『普遍我』と云ふ所が、皇統一系說よりも、深い所に入つて居る思想であります。

（二）　靈德理想說

是は姉崎博士の『宗教と教育』と云ふ著書の中に擧げられて居り、色々の方面に亘つて詳密に論じて居られるが、中に就き必要と思ふ點だけを拔いて述ぶるのである。

姉崎博士の說は皇統一系の意味合と宇宙的靈德とは、完全なる思想としては之を併せて考へなければならぬと主張するので、卽ち皇統一系の事實の上に、宇宙大の靈德が合して居ると云ふことを、體と用とを以て說明して居らるるのであります。

- 體
  - 事前の理
  - 久遠の法
  - 宇宙的靈德
- 用
  - 皇統一系
  - 億兆一心

建國の事實以前に存する事前の理、卽ち靈妙なる意味合のもの、久遠の法、宇宙的の靈德、これが『體』となつて、皇統一系、億兆一心の『用』が顯れて居ると云ふのである。此『體』と『用』とは天台大師が法華經を講じた時に、『名體宗用敎』と云ふことを言はれた、其語から取られたのであらう。

『天壤無窮の寶祚、萬世一系の皇統』是は國體の要素には相違ないが、國體の實體ではなく實體の發現である。皇統の無窮とは國體と云ふ大本の因より出た結果で、皇室の御稜威は其力の發表である。國體の體とは是等發表作用の凡ての源となり大本

となつて居る靈德で、此の靈德は久遠の法、事前の理である。天地化育の德は天人統治の威嚴恩德となつて、天祖の神靈に現れた、是れが國體の大本である。

此の宇宙大の靈德が日本の皇室に顯れて、そこに國體の大本が定まつて居ると云ふのであります。併し茲に注意しなければならぬのは『體』と『用』との意義でありますが、此の『體用不二』と云ふことは、餘程よく考へ合はせなければならぬ。法經華の講義の場合などには、法經華の實體は宇宙の眞理であると云ふことと、本佛卽ち釋迦牟尼は作用であると云ふこととに付き、此體と用との關係は頗るやかましき問題となつて居る。段々議論が進んで『體用不二』とも『法佛不二』とも云ふ歸結に達して居る。それから又佛を說明する場合には『法身應身不二』と云ひ、『法身』は眞理の本體にして始無く終無く續いて居るものであるが、それが必要に應じて救ひの爲めに顯れて來るのが『應身』である。故に應身は隱れたり顯れたりするが、法身は無始無終に存在して居ると云ふのであり、而もこの法身應身を不二と見て、應身の常住と、絕對とを信解するのであります。丁度さう云ふやうな具合に無限の靈德は萬世一系の皇統に合して、『體用不二』の關係を成して居り、萬世不易の皇統の上に不滅の靈德が合して居るのであり、歷代の天子樣は恰も應身の作用のやうに、法身を具へて絕對の德を有したまふのである。此の『體用不二』の關係を十分に會得することは、頗る大切な事であらうと思ふ。

（ホ）　靈氣不可侵說

是も私が當嵌めた文字でありまして、小笠原子爵に承はつたらば宜いのでありますが、假に斯ら名づけて置きます。

此說は何か詳しく書かれたものがあるか分かりませぬが、佐藤將軍の著國防史論の上卷に『日蓮上人の國家觀に就て友人某に答ふ』と云ふ書翰中に、論ぜられて居るので、左の如きことを云つて居らるる。

上行の出現すべき國相は神聖不可侵の靈氣を有し、卷いては世界眞義の中心となり、

舒べては統一的に宇宙を靈化するに足るべきものならざる可らず、之を是れ法華經有緣の國土とも申すなれ。嗚呼此の不可侵の靈氣、卽ち相對の諸力を超絕したる大威力の實在は、申すも惶こけれど、天成の神統を垂れて之を無窮に傳へ給へる、大日本國の御稜威ならで、世界何處にか求め得べき。

一種の神聖侵すべからざる靈氣があるが、それは宇宙の靈氣であつて縮めては世界道義の中心となり、道德の生命となつて人類の間に顯れて來る、又之を擴げたならば、天地宇宙に磅礴して行く所の、天地正大の氣である。其力が我が國體に顯れて來て居るものである。それが我國の御稜威となつて顯れて來たものである。故に我國の皇室の力は相對的の力を超絕して居る。卽ち富の力、德の力、兵の力、知の力と云ふやうな色々の力を超越して、何者と雖も侵すことが出來ない、何者も對抗することの出來ない所の、無限の靈力を顯はされて居るものである。それが我が國體であつて、無論皇室と一致して顯れて居るのである。

（一）君臣感合說

是は井上（圓了）博士が主張せられて居るのであります。『國體及忠孝ヲ論ス』と云ふ論文として、發表されて居るのであるが、井上博士は我が國體の意味を客觀と主觀とに分けて說明されて居る。

- 客觀
  - 物界
    - 氣候（溫帶）
    - 地味（豐沃）
    - 風景（秀麗）
  - 人界（萬世一系の皇統）
- 主觀
  - 心界
    - 一種の靈氣
    - 大和魂
  - 外界
    - 神聖の國風
    - 光輝ある歷史

客觀の物界に於ては氣候溫帶、地味豐沃、風景秀麗と云ふやうな自然の天幸があり、人界の方に於ては萬世一系の皇統を戴いて居る、斯くして世界無比の國體が顯れて居る。又主觀の心界に於ては一種の靈氣が凝つて大和魂と成り、外界に於ては神聖なる國風を有し、光輝ある歷史を作つて居る。斯う云ふ具合に天然の方には秀麗なる所があり、人界には皇室を戴き、心界には大和魂を有し、外界には一種の神聖なる國風と光輝ある歷史を作つて居る。此の全體が集つて、君臣感合し、天皇の大御心と億兆一心の忠愛の心が感合して、我國は成立つて居る。詩文の證明としては藤田東湖先生の正氣の歌、及び會澤正志先生の新論を引いて、『宇宙純粹の氣こゝに鍾つて此の善美を啓發す』と云ふことを申されて居るのであります。

是は君臣の感合する所までを體用の働きの中に入れて見るのである。無論國體の靈動靈作用から來るのであるから、人民に億兆一心の德が顯れて來る所までを、國體の中に入れて考へた方が、よいのである。

（ト）　俊德幽玄說

佐藤將軍の國防史論の中に『俊德幽玄說』が詳しく論ぜられて居つて。是は特に私が玆に御紹介する迄もなく、知れ渡つて居ると思ひますから、私が感じた點だけを擧げるに止めておきます。

此の『俊德』の文字の出處は堯典にある、『克く俊德を明にす』と云ふ文句から採つたと云はれて居る、『俊』と云ふ字の義は『俊秀』などゝ云ふ熟字もあつて、他のものに『ひいでゝ居る』『卓越して居る』と云ふ意味を有つて居る、千人に秀づるとか萬人に秀つるか云ふ廣い意味であり、又山の高く聳えて居る『峻』と云ふ字も意味は同じであり、字典に依て見ると『雋』と云ふ字も同じく『俊』に通ずるので、我が國體が他の諸國に卓越して居る意味であり、天地の德を享けて現れて居ると云ふ意味から、俊德と云ふ名が出たのであらうと思ふ。『幽玄』と云ふことは其奥が深うして測るべからざる意味である。言葉を以て述べ盡すとが出來ない、思想を以て測り盡すこが出來ないと云ふ意味

を『幽玄』と云ふのである。佐藤將軍は『玄』の字よりは『妙』の字の方が宜いやうに思ふと云ふお話もありましたが、是は佛敎などでは『絶言歎』と申して、何とも言葉を以て讃めやうがないと云ふのが、『妙』と云ふ字の意味であります。『言語道斷心行所滅』と云ふことがありますが、言葉を以て表はさうとすれば、其の言葉が無くなつてしまふ。『心行』と云ふのは心の働きでありますから、心で色々考へて見ると尊さが考へ盡されぬと云ふことが『妙』或は『玄』と云ふ字の意味であります。それでありますから、國防史論中に用ゐられて居る文字を見まするとと、色々の尊とき文字が使つてある。『無上莊嚴の靈位』『絶對の靈位』『理想の德化』『圓滿無邊の大俊德』『無上崇嚴の御國體』『幽遠崇高の御國體』其他色々ありますが、要するに言葉で云ひ表はし得ない爲めに、色々と文字が變つて顯れて來るのでありまして、大にしては宇宙の靈力が我が皇室に合し、さうして其德が永久に顯れて居ると云ふ意味でありませう。國防史論の四十六頁の處に、

有德、王となるの主義は大德庸德の爭を生じ。强者王となるの主義は强弱相喰むの爭を生じ、富者王となるの主義は貧富相爭ふの結果となり。智者王となるの主義は智を弄して相賊するの結果となるべく。如斯競爭の意義を含める主權者は到底永遠に王たること能はず。從て簒奪の跡竟に絶ゆるとなきは明白なる事實である。之に反し是等の爭端を絶したる主宰者は常に神聖にして永久に平和の保護者たるべく、世界の平和を永遠に維持し得べき靈位は、此の俊德を有するにあらざれば、占むること能はざるは、何等の疑を挿むべき餘地がないのである。

然かも此の無上崇嚴なる靈位は「ナポレオン」及「ケーザー」者流の汚すべき座にあらざるは勿論、釋迦、孔子、耶蘇の如き、堯舜禹湯文武の如き聖人の踐むべき處にあらず、富にもあらず、兵にもあらず、德にもあらず、智にもあらず、この諸力を絶して一種靈妙なる作用を有する大靈德にあらざれば、之を占むること能ざるは勿論である。

尙ほ御稜威の發動に就ては、同じく六十二頁に、

我が國體は決して家族主義の轉化にあらずして、絶對位を中心として確立したる理想的國體なり。民族を同ふするが故に堅實なる結合を看るに至れりとの觀念の如きは、我が雄大なる御國體と相容れざる僻論なり。對絶位を中心として確立したる理想的國體は、如此偏狹ならざるべきは固より論ずるを待たず、苟も我が國體の無上幽玄にして崇高なるを感謝し、誠心を捧げて歸依するの人は、其の民族の何たるを論ぜず、皆等しく我國民たるに害なきは、毫厘も疑を容れず、世人の熟知する如く、我が皇統は建國の始より我等臣民に君臨したまへり、天來の君主統を萬世に垂れたまふとは、則ちこれなり。葦原の千五百秋の瑞穗の國は、是れ我が子孫のきみたるべき國なりと仰せられたるは、則ちこれなり。和氣公に賜りたる宇佐の神勅の如きは、明かに御國體の悠遠崇高にして、其の雄大なる殆んど方物すべからざるを證するにあらずや。而かもこれ實に萬邦を融和して、毫も凝滯なき所以の本源なり。

御稜威は國內の人民に對するばかりでなく、世界の人類に對して德化を及ぼす所の聖德であり、從つて國民道德に於ても又人道の上にも我が皇室を翼賛し奉り擁護することに於て、一切のものがそこに包容せられ、開發されて行くのである。言葉を約めて言へば、個人的に顯れる德も、世界大に顯れる博愛の人道も、忠君を中心にして發現して行くと云ふので、佐藤將軍は九つの德を擧げて居る。

孝、義、貞、悌、禮、智、勇、信、仁

この九德は總て忠君の一を本にして、それに包容されて發現して行くのである。此の道を離れて孝道もなく仁もなく義もなく貞悌もなく、禮智もなく信もなく勇も成立たない。簡單に云へば個人的の人格完成も出來なければ世界的の人道道德も發現しない。忠道が一の中心點になつて總ての道德が發現して行くものであると云ふ意味合を述べられて居り、それから進んで御國威の發動を「靈動」と云ふ言葉で述べて居る。其の事は七十二頁に出て居る、其の大體の意味を申しますれば皇統の働きに依つて日本國民は常に感化せられて行くものである、それが爲めに我國の國民は協同一致の精神が出

來て、所謂億兆一心の忠君の働きが出て來るので、其の億兆一心の忠君の國民性も、本は御稜威の發動に依つて導かれたのである、日本國民自身が大和民族の精神を以て、下の方から發現して行くと云ふよりは、上の德が民心に感孚して忠愛の美風が養はれて居るのであると說かれて居る。

斯う云ふ問題を深く研究しない人にはさう云ふ事はどうでも宜い、實際國民に忠愛の精神があれば宜いと云ふかも知らんが、それは甚だ粗末な思想であります。國民天賦の良心が御稜威の力に依て導かれると云ふことは、非常に大切の事であります。無論人間の良心を除いて現れるものではありませぬが、佛敎の語で云へば性質の原因となつた『正因』と、それから之を助ける『緣因』との二つがある、正因は本來有つて居つても、之を開發する緣因に觸れなければ、發現しないのである、『一因非生』と云つて、米の種があつても、土なり水なり日光なりが加はらなければ、發生しないと同じで、國民性は人間に良心があつても、其の良心を大和魂に仕上げる所の緣因がなければ出來ない。其の緣因には則ち我國の天然の地理なり氣候なり境遇なり、或は國民相互の接觸なり、歷史なりが、手傳ふのでありますけれども、さう云ふものは助けの中でも輕い、例へば日本と同じやうな氣候風土であつても、今の日本國民の樣に忠愛の觀念が涵養せられるとは云へない。故にさう云ふものは助けの中でも附屬的であつて、我が國民性を作り上げて居る、主なる力は良心にもあらず、風土にも氣候にもあらずして、確かに御稜威の靈動が民心に感孚して居ることを主としなければならぬ。卽ち我が國體は發して皇統となり、民心となり、靈動となつて顯れて居る。是を體用不二から見れば、體の中には俊德が本となつて、その用としては、其の俊德は皇室に合し、御稜威は民心を感孚し、そこで億兆一心の忠愛の觀念が顯はれて居る、是だけのものが包容されたのを、我が國體の體用不二の體と見なければならぬ。强ひて分ければ體と用とに分れ、又用の內で皇統と民心とに分れるけれども、之を達觀すれば、體用不二の一國體と見るべきである。是は今日の思想では、明晰になつて居りませぬけれど

も、段々國體の意義を闡明に研究されるに於ては、そこに歸着すると思ふのであります。教育勅語の終りにありまする『咸其德ヲ一ニスル』と仰せられた聖旨を、よく拜察しますると、ずつと體用一切を合して一國體と見るべきであります。さうすると云ふと自分の心が皇室から離れることは出來ない、それを離れては完全なる國民ではない。日本國民の資格は御稜威に感孚して、忠愛の觀念を養うて、始めて完き日本國民と云ひ得られるのであります。斯う云ふ事に相成りますれば愛國の精神が、ただ其國家に生れて居るからとか、國家全體の利害が直ちに個人の上に影響するとか、國民は團結の力を養はなければならぬからとか、祖國を愛せなければならぬと云ふやうな、西洋人が普通云ふ愛國心とは、日本人の愛國心は違つた點がある、西洋人の云ふ意味も無論捨てはせぬけれども、特殊の意味に於て顯れて居る。それを國防史論には『無價の大寶』と云ふ語で表はされて居る。法華經の提婆品に女が佛になつた時に、無價の珠を奉つたといふことがある、無價と云ふのは價が無いと云ふ意ではなく、價の付けやうがない非常に尊とい意味を表はした語であつて、佛敎では無價とか無學とか云ふ語を使ふが、普通無學と云へば何も知らない人のことであるが『無學の聖者』と云へば一切學び得て學ぶことが無くなつたと云ふ意味であります。それ故無價の寶と云ふことは價の付けやうがない尊といと云ふことであります。我が國體は普通の國體と意味が違つて、大にしては宇宙の靈德に合し、世界の文明に貢献して天下を光宅し、又內には國民を指導せらるゝので、この體用が合して一の國體である。我が皇室に依つて國民の安寧幸福が保持せられ增進せらるゝのみならず、世界の幸福が保持し增進せらるゝのであり、又大にしては天の德を地上に實現せらるるのである、故に縱ひ一命を捨てゝも我が國體を擁護しなければならぬことが意識せられるのである。

（八）國家觀の根本問題

以上述ぶるが如く、國家の起原には六通りの說があり、又國家の目的には十通り說があり、而して理想的國家說に於ても色色の思想があつて見れば、國家觀も隨つて分れて居ることが知られる、併し根本問題として玆に二つの大きな問題が横はつて居る、其一は『科學的知識に局して國家を觀る思想』と『哲學宗敎の如き深遠なる意味を加へて國家を觀る思想』の別である。

- 國家觀
  - 科學的知識に局するもの
    - 非道德的
    - 道德的
  - 哲學若くは宗敎の知見を加ふるの

此の觀方に依て非常に違つて來る、其二は『孤立的國家觀』と『包容的國家觀』との別である。

- 國家觀
  - 孤立的
  - 包容的

此の二點に就き少しく意味を明かにし、而して國民道德の歸結に達したいと思ふのである。科學的知識に局する國家觀は、前に述べし加藤博士の主張せらるゝ主權强力說、美濃部博士等の主張にかゝる主權は機關なりと云ふ說、或は家族制度の發達したものであると云ふ歷史から來た君民同祖說、或は文明の程度に依て國家を觀る思想、或は皇統が歷史の上に於て萬世一系に進んで行くと云ふ事實だけを根據にする思想、これ等は科學の方に於て承認が出來る說である。然れども是だけでは、我が國體の眞義は說かれぬ。それでは未だ皇統に合して居る所の天德が分らない、又御稜威と云ふやうな意味がよく分るまいと思ふ。たゞ科學の知識のみで說明したならば、決して眞正の解釋は付くまいと思ふ。そこでどうしても我が國體の眞意義を知らうとすれば、科學的の研究のみに局限し信賴することは出來ぬ。それ以上に哲學的或は宗敎的の深遠な研究を加へて見なければ、其の眞意義を知ることは出來ぬ。さうして此の科學的知識に依る國家觀の中に於ても、非道德的と道德的の二つの觀方がある、主權强力說

の如きは非道德的に觀て居るのであり、征服とか强力とか云つて道德的の意味を含んで居らぬ。然るに家族制度の發達したものであるとか、或は文明の程度に於て觀ると云ふのは、道德の意味を加へて觀て居るのである。先づ西洋の理想の國家とすれば、科學的の知識を基礎にして、道德的に說明をすれば、餘程良い方である。我國で云へば穗積博士が法律學上から、文明程度說を立て、憲法講義に於て道德的國家を主張するのは、科學知識に依つて居るけれども、それに道德的の意味を加へて居る。或はプラトンとかヘーゲルの國家觀は道德的に解釋して居る。それは深遠なる我國の國體は知らないけれども、どうか斯うか暗合して居る所もある。所が純粹の法律思想より觀て主權は機關であるとか、或は社會學的に見て主權は强力であると云ふが如きは、斷じて赦すべからざる說であらうと思ふ。

又哲學的宗敎的の國家に就ては、此考の定まらぬ人の國家觀は唯物主義であつて、哲學的宗敎的の深い處を採用しないで、一切科學の知識に依ると云ふのは、己に其頭が唯物主義であるからである。神が在ると云ふことも人間の心靈も認めずして、一切器械的に解釋するから、我國の國體成立に對しても、歷史が長く續いて居るからとか、歷史の事實が斯うであるからとか云ふ、科學的知識に於て認むる點のみを擧ぐるので、畢竟唯物主義であります。宇宙に靈妙なる力が在ること、宇宙に靈妙なる神が在ることを信ぜず、又我々の精神に靈妙の力が在ることを否定して行くので、是が段々進んで行くと、非常に民心を腐敗せしむるやうになる。唯物主義が經濟問題に加はれば、遂に彼の社會主義の如く猛烈なる反抗思想を現して來る。唯物主義が文學の思想に加はれば、彼の劣惡なる自然主義を生じて來る。或は金錢の上に此の唯物主義が加はつた場合には、非常に拜金思想墮落思想が伴つて來る。金は無くてはならぬが唯物主義の觀念が加はると大に害が有る、早く云へば螟殼町思想のやうなものとなり、德も義理も構はないで唯だ金錢と云ふことのみに走つて行く。又唯物思想が法律に加はつて來れば、非常な弊害を生んで、罪人は益〻殖えて來る、たゞ純粹の理論のみを以て人民を懲罰し

ようとし、法律が嚴しくなればなる程、犯罪人は增加することは、各國の歷史に於て證明が出來る或は兵士に唯物思想が加はつたら、どうしても忠愛の觀念は滅びざるを得ぬ。唯物思想を根據にして、犧牲の精神が養はるゝと云ふことはありませぬ。斯くの如くに唯物思想は何に加はつても非常に禍をするのである。或る西洋人の言つた事を引いて御參考に供して置かうと思ふ。

日本の或人等が國家主義日本主義と云ふことを喧しく云ふけれども、それを赤裸々にして遠慮なく批評して見ると、總て唯物的傾向を有つて居る、如何に言ひ譯をしても唯物思想であると云ふことは遁れられぬ。又今の日本の普通人の言つて居る國家主義を觀て、唯物主義がそこに潛伏して居ることを觀破することの出來ないやうな者は、餘程の馬鹿者であらうと思ふ。さうして此の唯物思想なるものは、どう云ふ影響を與ふるかと云へば、愛國心を土臺から引拔いてしまふのである。然るに國家主義である日本主義であると云うて、盛んに說く所の思想の根據が唯物主義である。唯物主義は總ての事を器械的にのみ說明せんとするのであつて、宇宙にはたゞ物體あるのみ、物體の運動あるのみと見て、そこに精神なり神の在ることを見ない、隨つて今迄日本國民が尊敬して居つた所の神樣であるとか、御先祖であるとか、又歷史にある所の先輩、偉人、人傑と云ふやうなお方を、有り難がる精神も消えて來る。さうして此の唯物思想は過去の歷史にある事實を打消すのみでなく、現在生きて居る人間に非常に害毒を與へて行くものである。人には靈魂はない死んだ後があるものでない、それは空想であるから、ただ現在が貴いと云ふので、現實現實と云ふことを言ふ。それも理想と調和して居るなれば宜いけれども、唯物思想であつて見れば理想は卑い。理想はただ利益と幸福と權利とである、どうしても唯物思想から來た者の現實と云ふ言葉は、反對に未來を否定し、神を否定し、靈力を否定する。彼等が現在主義現實主義と云ふのは油斷ならぬ、語を換へて言へば良心を引拔き、幽冥界の賞罰を恐れなくなり、ただ現在の名譽と肉慾に滿足を得んとすることに傾

いて來る。若しさう云ふことであつたならば、彼等が國家主義日本主義と言ふけれども、それは確かに國家を基礎より動かさんとする惡思潮である。故に今の日本の國家主義は、餘程氣を付けないと云ふと、後年大變な害毒を流すことになるであらう。

是は頗る適評であります。此頃多少氣が付いて居るやうであるけれども、教育上に於ても、法律上に於ても、深遠なる思想を顧みず、宗教的の信仰なり哲學的の思想なりを打捨てて、やつた時代があつた、其の影響が今日現れて來て居るのである。どうしても、眞正の國家主義を立てようとするならば、單に歴史的の學問とか、人類學とか、法律學とか云ふ科學の知識のみでは、眞正の國家は分らない、殊に我が日本の國家は分らないと云ふことを、よく腹の中に疊み込んで置かないと云ふと、科學過信の弊に囚はれ易く、此の西洋人の言つた如く、愛國心を土臺から引拔かれてしまふやうなことがあらう。

次には孤立的と包容的との國家觀の相違であるが、前者は東西の文明を切り離して考へるのであり、後者は世界的の文明を包容して我が國家を觀るのであります。孤立的の方は世界的の文明を切り離して、日本には日本風のものがあるから、日本の風俗日本の思想を保護すれば宜いと云ふことになつて、非常に狹隘の思想に囚はれ、外の國はどうあらうと斯うあらうと構はない、我國は斯うであると考へ、自主的精神は宜いが、それを濫用して狹隘なる精神となるのである、道德上に於ても、思想上に於ても、有らゆる文明を進めて行く上に於て、中心を立つる所の精神は宜いけれども、兎角それが狹隘の精神に陷り易い。さればと云つて包容しようとすれば、西洋風にかぶれ易く、又他の思想に囚はれ易い。又日本思想を維持しようとすると、孤立思想に固まり易いのであつて、兩者共にさう云ふ弊害を免れ難いのである。是では眞の國家觀でない。眞の國家觀は有らゆるものを包容しつゝ、其中心を明かにして行かなければならぬ。御製に

國といふ國の鑑となるばかり
磨けますらを大和たましい

この御聖旨の如く、有らゆる國の模範となるの自覺がなければならぬ。又

萬つ民救はん道も近きより
おして遠きにゆくよしもかな

萬民を救ふと云ふ濶大の理想を目途に置いて、先づそれをやり遂げるに就ては、國家の經營發展に努めなければならぬ、是が建國の御精神で在らせられる。この著想が非常に大事の點であります。佐藤將軍の國防史論に

我が日本國には一種靈妙なる特性を有し、神ながらの靈教あり、如何なる教義をも融合し、而かもよく之を醇化し、換骨奪胎して臣隷たらしむるの、大靈德を備ふる大靈教あり。

如何なる思想と雖も日本の國に來れば悉く融合醇化せられ、換骨奪胎して、我が靈

教に合して働く。故にこれを『惟神の靈教』と云つて居らるゝのであります。如何なる思想と雖も日本の中心思想に融合醇化せしむるので、決して他の思想を排斥するのではない。この事は言葉で云へば何でもないが、國民の思想が果してさうなつて居るかどうかを考へなければならぬ。そこが大事の問題であります。中心思想を維持するときは狹隘に失し、包容的に廣くすれば中心を失つてしまふのであつて、今日の思想は兎角さう云ふ傾向を示して居るが、それでは一向仕方がない。先帝陛下の御製に、

我が園にしけりあひけり外つ國の
草木の苗もおほし立つれは

外國の如何なる草木でも之を我國に移して、適當に培養して行くならば、それが生ひ繁りて美しき花を開き、日本の人が見ても眼を樂ましむるやうになる、其苗を移し植えて發育する方法を誤らぬやうにしなければならぬ、又『仁』と云ふ御題にて

國の爲めあたなす寇は碎くとも

愛しむへきことな忘れそ

我國に敵對する者は之を打ち碎くけれども、他面には之を慈しむ仁愛の精神がある。仁と勇とが調和されたものが日本國民性である。『愛しむへきことな忘れそ』と仰せられた、言葉は簡短であるけれども、是が卽ち包容的の御精神であつて、敵對する場合には之を碎くけれども、亦直ちに之を懷けて行く力を示されたのであります。又國民に對しては、『民安かれ』と云ふ事を御製の中には多々仰せられて居る。又外に對しては『萬つ民救はん』と云ふ御精神となつて顯れ、更に『眼に見えぬ神の心にかよふこそ人のこゝろの誠なりけれ』と云ふ、敬神の御精神が顯れて居る。國民を思ふ御仁愛、又世界大の萬民を救ふと云ふ御仁愛があつてこそ、世界の中心となるのである。故に國民たるものは、世界の中心たる皇室に對して忠誠を棒げねばならぬ。然るにたゞ國民道德は日本國の爲めである、世界主義は世界全體の爲めである、宗敎は個人若くは宇宙の爲めであると云ふ風に、切り離して考へるのは大なる謬りである。この綜合せられ統一せられた思想が顯れて來なければならぬのである。吉田松蔭先生が德川幕府の爲めに囚はれて、京都を通過の時、宮闕を拜しての詩がある。

開說今上聖明德。　敬天愛民出至誠

今の天子樣の聖明に在らせらるゝことは、天を敬ひ民を愛しみ給ふことが至誠より發し、實に尊とき聖德を有せられて居ると讃美したのである。『敬天』は卽ち天地の公道に率ふ心であり、『愛民』は『萬つ民救はん道』『民安かれ』と云ふ、大御心であります。

先帝陛下に於かせられては敬天愛民の御心が眞に至誠より出てゝ、何人も感奮興起しなればならぬ御德を具へて居らせられたのである。此の至誠感應と云ふことは、科學的の知識や唯物的の思想では、迚も解釋することが出來ない。隨つて科學思想のみでは、我が國體を解釋することはむづかしいのである。所が科學萬能の考の人が多いのは、頗る憂ふべきことで、實際どう云ふ考で國家主義を論ずるか、又どう云ふ考で國民道德を鼓吹するかと云へば、その思想の根柢を撿し來れば、事實上には愛國の觀

念を引拔くやうになる者が少なくない。故にさう云ふ思想、さう云ふ學說を吐く者があつても、それに迷つてはならぬ。或は法律を學び、或は社會學を學んでも、日本の御國體をよく知らぬ人、又は哲學や宗教の信仰に於て徹底せざる人の論には、耳を傾けないかよい。

我が建國の精神、我が皇祖皇宗の遺訓を拜察し奉るときは　先帝陛下の聖旨は先帝陛下に依つて始まつたものではなくして、我が皇宗の遺訓を體現遊ばされたのである。皇祖大御神が下されたる神勅の御趣意に依りますれば『寶祚の隆えまさんこと當に天壤と窮り無かるべし』と仰せられて居り、此の天壤と窮り無き悠久と云ふことは、たゞ皇統が長いと云ふのみではありませぬ。中庸に『悠久所ニ以成レ物也』と云ふことがありますが、天壤無窮と云ふ長き時間、絶えず此の御稜威の光が輝いて行くのは、それが空間に擴がり世界大の御仁愛を意味して居るのであります。卽ち天壤と窮り無かるべしと云ふ悠久は、取りも直さず空間には世界大に洪大なる御德が發現することを示して居るのであります。佛敎でも時間の上で『實在』と云ふことを說き、空間に擴がつて居ると云はずとも、たゞ一言『常住』と云へば、此の常住の働きが無限に顯れて來るは自明の事である、中庸に『悠久所ニ以成レ物也』とあるも同じである。要するに成し遂げる時間を天壤無窮と仰せられたものと、拜察し奉るべきである。總てのものが時間の上に顯れて居る、人間個人で云へば『命有つての物種』と云ふが、生命中に一切の活動が顯れる。天壤無窮と云ふのは、無窮の上に洪大の活動が含まれて居るので、此の意味は神武天皇の仰せられた『天業を恢弘し天下を光宅す』と云ふに至つて、尤も明白になつて居るのであります。天業をおし弘げて天下の人類を救ふ働きをする爲に、大和の橿原に都を定め給ふと仰せられて居るので、歷代の天皇の思召を拜察し奉りても、非常に廣い包容的の精神を顯されて居る。降つて維新の當時に御示しになつた御誓文に依るも、我國はどこ迄も世界大に進むべき意味を示されて居る。或は『知識を世界に求め』と云ひ、或は『天地の公道に基くべし』と仰せられて居る、又憲法發布

の時に御示になつた御趣意を拜察しても、餘程廣い意味に顯れて來て居る。其外明治二十六年に帝國議會に賜はりたる詔勅にも。

古者皇祖國を肇むるの初に當り六合を兼ね八紘を掩ふの詔あり、朕既に大權を總攬し、藩邦の制を廢し文武の政を革め、又宇內の大勢を察し開國の國是を定む、爾來二十有餘年、百揆の施設一に皆祖宗の遺猷に率由し、以て臣民の康福を增し、國家の隆昌を圖らむとするに外ならず。

此の『祖宗の遺猷に率由し』と仰せられたこと、或は『六合を兼ね』と仰せられたこと、又『八紘を掩ふ』と仰せられたのは、先帝陛下は常に包容的の御精神を有せられたからである。中心は常に祖宗の遺訓を奉體して居らせられたので、彼の世間で言ふ歐化主義であるとか、或は時代思潮に流れて行くと云ふやうなことは、少しも御考へなさつて居らぬ。どこ迄も中心は遺猷に率ふて大に皇基を振起すと云ふ御趣意で、御進みになつて居るのであります。

此の國體のことを學者等が色々議論するのでありますが、思を潛めて大觀したならば、有らゆる思潮、卽ち今迄にある儒教の精神でも、佛教の精神でも、又近世の西洋文明の思想でも、悉く我が國體の精神と一致して進んで行くのである。勿論其中には惡い分子もあるが、それをよく吟味してやつて行けば、惟神の靈教に融合して進んで行くので、少しも妨げにならないのである。之に就ては筧博士が古神道の精神を會得する程度を六段に分けて居らるゝが、今之を假りに生徒に譬へて六級に分けて論じて見れば、餘程面白い事と思ふ。

一年生の生徒が我國の惟神の道に就て考へて居る事は、たゞ儀式とかお祭り騷ぎをして、何か氏神樣だなどゝ云つて居る。是が我國の神道に於ける一年生である。

それから二年生になると、或る一つの思想に入つて居つて、佛教を信ずるとか基督教を信ずるとかゝて居る。けれども一の宗教に囚はれて本末を辨へぬやうになつて、基督教の教が有り難い爲めに國體を忘れるとか、或は佛教の語に囚はれて國體を忘れ

るやうになる。是が二年生である。一年生と二年生とは其間に大分違ひがある。

三年生はどうかと云ふと、耶蘇教なり佛教なり儒教なりの信仰を通して、古神道の精神を尊ぶけれども、本統に國體の意義が分らないで、迎合と云ふか、間に合せと云ふか、佛教も粗末することは出來ぬ、耶蘇教も粗末にすることが出來ぬ。儒教も粗末にすることが出來ぬ、併し國體も粗末に出來ぬと云ふ、眞に根抵から其の意義を解して云ふのではなく、惡く云へば自己の教會宗派の存在を鞏固にする爲めに、國體のことを口にするである。是が三年生である。

それから四年生は古神道に正しき信仰を有し、國體の尊とき意味合は會得して居るが、狹隘の精神に囚はれて、包容寛大の精神が無い所の者である、是はなか〳〵少くない、上流に斯う云ふ思想の人が澤山ある、是は國體の尊嚴を思ふが爲めに、他の思想を敵とする考が強いのである。

五年生は古神道の大理想の下に立ちて、他の教への一つなり二つなりを本當に融合して居る。即ち國體の意義を理想として學問と融合した學者、或は國體と佛教とを本當に融合して居る學者、是が五年生である。

さて六年生はどうかと云へば此の國體の大理想の下に立ちて、一切の宗教なり理想なりを、悉く包容し、其眞意義を發揚する力を有つて居る者、即ち惟神の靈教を眞に會得し、又之を發揚する力を有する者が六年生である。

そこで我國民は悉く此の六年を卒業すべき筈の者で、決して四年生だけで宜いとか五年生だけで宜いとは言へない。と論ぜられて居る。

之に就て我國の先輩學者と稱せられて居る人、重に德川時代の古學復興の頃に於ける先輩の考、それから德川時代に勢力のあつた儒者、是等の人々が如何に在來の思想を考へて來たかと云ふことを知る爲めに、玆に其中に就て代表的の人物を擧げて其說を紹介し、併せて聊か批評して見たいと思ふ。

今でも色々の思想の流れが遺つて居るが、古學復興の方で名高い人は加茂眞淵、本

居宣長、平田篤胤であります、其の他にも澤山ありますが、先づ此の三人が古學復興に付ては三傑とも云ふべき人人であります。日本の古學を復興した點に於ては、餘程豪らい人々でありますけれども、惟神の靈教の方から申せば、筧博士の所謂四年生に當つて居るので、五年生六年生と云ふ處迄は卒業して居らぬやうに思はれる。それは決して惡し樣に批評する譯ではございませぬから、誤解されては困るのでありまして、狹隘の精神を今の日本國民が有つて居つては、迚も堂々たる日本の天職を實現することが出來ぬから申すのであります。

例は澤山にあるが、其中に就て面白く見らるゝのは、眞淵翁の『國意考』と云ふ本に書いてある事であります。之に付て其當時異論が起つて、次から次に論駁が現れたのでありますが、此の『國意考』の思想に依ると、儒教でも佛教でも、非常に國害のやうに考へられて居る　つまり儒教などが渡つて我國に文字が弘まり、人間の知識が開けるやうになつた爲めに、惡い事をするやうになつて來たと考へて居る。非常に淺薄な思想に囚はれて、自然主義者社會主義者ぢみた思想を澤山含んで居るので、是は十分吟味を要する事であります。眞淵翁は人間は鳥や蟲ケラと同じやうなもので、別段に之を豪らい者と思ふのは間違つて居ると『國意考』に論じて居る。

世の中に生るものを人のみ貴しとおもふはおろか成こと也　天地の父母の目よりは人も獸も鳥も蟲も同じこと成べし　夫が中に人ばかりさときはなし　其さときがよきかとおもへば　天が下に一人二人さとくは　よきこも有べきを　人皆さとければかたみに其さときをかまふるにつけて　より〳〵によこしまのおこれるなり

儒教には吾人人類には天賦の良心があると言ふが、其の天賦の良心が危險であると駁して居るのでありまして、非常に誤謬に陷つた思想であります。又其の外儒教を論じて居ることが殆んど外づれて居る。それから佛教を論じて居ることなどは、笑ふべきやうな事がある、たゞ一つ褒めて居る事がある。それは或人があなたは何ぜ儒教を攻擊して佛教を攻擊しないかと云つた所が。佛教は儒教と違つて、人を馬鹿にするも

のであるから、攻撃しないと云ふ意味のことを『國意考』に述べて居る。

或人は佛のことをわろしといへと　ひとの心のおろかになり行なれば　君は天が下の人の　おろかにならねば　さかへまさぬものに侍り　さらば佛のことは　大なるわざはひは侍らぬなり

卽ち佛敎は國民を馬鹿にして呉れるから宜いが。儒敎は人を賢くするから不可ぬと云ふ、愚かな思想であります。それから又佛敎を惡しく云つて居る事がある、佛敎は因果應報を說くから惡いと云つて居るので、その文章を讀んで見ると、をかしいやうな事がある。

さてむくひなどいふことを　多くの人さることおもへり　其事古き世よりの證ともいはむもわづらはし　人の耳にも猶疑ぬへし　たゞ今の世にてたとへんに　先ず罪報は人を殺せしより大なるはなかるべし　然るに今より先き世大きに亂れて　年月みな軍して人を殺せり　其時一人も殺さでありしは　今のなみの人どもなり　人を少し殺せしは　今の旗本侍といふ　今少し多く殺せしは大名と成りぬ、又其上に多く殺せしは　一國の主と成ぬ　さてそを限なく殺せしは　いたつてやむごとなき御方とならせたまひて、世々榮え給へり　是に何のむくひの有りや　人を殺すも蟲を殺すも同じこと成るべし　すべてむくひといひ　あやしきといふは狐狸のなすと也

報いがあると云ふやうなことを佛敎に言ふのは、狸が付いて居ることであると云つて居る、尙色々の事を申して居りますが、要するに其の識見は極めて卑いものであります。所が之を辯駁した儒者が『國意考を讀む』と云ふ題で書いて居る。それは野村公臺と云ふ人でありますが、左の如きことを書いて居る。

惜乎其不レ能レ潛ニ心聖人之道一而獨見ニ我國上古淳素因循之治一與ニ彼老聃無爲自然之道一相似也以爲異域同揆治國之道莫レ善焉皇祚之長久勝ニ於萬國一者以ニ此道一己於此貶ニ譏儒道一爲レ小爲レ僞歷ニ詆群聖一無所ニ忌憚一也眞淵勸動曰直々所謂直者直情徑行之直乃戎狄之道也其不レ知ニ聖人之道一於是亦可ニ以見一焉又有レ同母爲ニ兄弟一異母

則姉妹姦通毋禁說此則禽獸知母而不知父之類也非人道矣以此爲國美事甚矣其惑也不直同人道於禽獸也至謂唯人有智故惡禽獸無智勝於人焉甚矣乎其言之也。

寔に論旨明白であるが、それが佛教のことになると、次の如く言つて居る。

要之雖讀聖人之書不知聖人之道也是以致此乖戾陷罪焉而惜夫其餘僻見强辯不足論矣若其破釋氏應報之說及駁我國近世所稱神道者之類則確論也君子或取之

斯かる偏見を以て論じて居る。

又儒教と神道と佛道との三つを併せて見る人がある、それは三芳野城長と云ふ醫師であるが、此の人は『國意考辯妄』と云ふ書に、我國は神儒佛三道を融合して、進まなければならぬと論じて居る。その序に

『世の教たる神儒佛の三のみ　天地間更に餘道ある事なし、有るに似たるは皆邪岐旁徑にして趣向すべからざるものなり　近世一種の國學者あり　儒を非り聖を罵り佛を罔す　特に神道を僻解し昆弟叔姪の亂婚を以て皆國の道とするに至る　誣妄狂濫誰か是を知らざらん　加茂眞淵實に之が兇魁たり……夫れ狗徒鼠輩の肯ふと肯はざるとは姑く置く　凡そ三教を奉ずる大丈夫たるもの　豈居なから大道の廢棄し人倫の頽壞せんとする胚胎を見るに忍びんや

又『國意考辯妄』の終りに

佛を罵りて人を殺すと云ふとも報ひはなき事なりといへるの類、種々の邪說ありといへども、皆餘りに道理に背きたる事ともなれば、童子の輩をして讀ましむるとも、皆よく其非を知るべし、故に辯此に及ばざるなり。

是に由つて復古神道派の思想が分かる、熾んに佛教や儒教を害物呼張りをして居つたので、獨り加茂眞淵のみならず、本居平田の二氏も皆同じ精神である。その國體を發揚せんと努めたる點は、賞すべきなるも、是れ全く孤立的に國家を說明せるもので

ある。筧博士の所謂四年生と看做すべきものであります。

水戸の儒者が儒教と神道とを融合したのは宜いが、彼等には深遠なる哲學の思想を缺いて居る。それで先づ古學復興の神道家と水戸の神儒融合の思想との此の二つは、日本の維新以前に於ける重もなる國家的思想である、そこへ西洋の思想が入り來つて、現代の思想を生んで居るのである。

水戸學派の會澤正志の新論、是は諸君がお暇があつたら御覽になつたら宜からうと思ふ。國體及び我國の歴史を論じて居るので、德川時代に出た儒者中では會澤氏の說は卓越して居る。併し又偏つた所もある。

兎に角德川時代に於ける古學復興の思想若しくは儒者の思想などは、狹隘に失する所がありましたが、段　それが融合せられ、又佛教其他の總ての思想が追々と一致して進んで行く所に、日本の健全な思想は有るのであります。今日でも西洋の思想に對して一概に之を斥けるのが宜い譯でもなければ、又西洋の思想に囚はれるのが宜い譯でもない。

佛教の方に於ては日蓮上人が、國家と佛教との關係を說明せられたのは、立派と云ふよりは寧ろ模範的の思想を示して居りまするし、儒者として國體を擁護する思想を發表して居るのは、會澤正志先生の新論などが立派なものでありまして、迚も古學復興學者などは較べものになりませぬ。佛教の精神と國體とを論じて居る。日蓮上人の立正安國論の精神、儒教の精神と國體とを論じて居る、會澤先生の新論の思想、それから眞淵翁あたりの古學復興の精神などを共に合せて融合して、始めてそこに國體觀念も國民道德も顯れて來る。又西洋の基督教の愛の精神、社會事業に努力する方面などは、採つて以て參考としなければならぬ。たゞ基督教の國家觀念が我國の思想と一致すや否やが問題であり、又西洋近世の文明が與へた科學的知識は、今更申迄もなく人民の幸福國家の繁榮を增す所のものであり、又西洋の倫理說は個人本位で注意を要するが、個人の責任を自覺させて他人を尊敬するはよい、此の健全なる個人の自覺、

健全なる科學の知識、又基督敎の愛の觀念、救濟事業などは、採つて以て我國の文明に融合して差支ないものである。我國の特殊の道德、忠愛の觀念を養ふ上にも助けとなる所のものがあらう、たゞ排斥的に他の思想を敵とし、宗敎の信仰を敵とし、世界の文明を顧みずして、頑固に忠愛の觀念を說くやうなことをせず、有らゆる方面を包容して、其の中心を確立して行かなければならぬ。直接に云へば國民は先づ忠君愛國の精神を養ふと同時に、一方には個人の自覺個人の力量を養ひ、世界的人道を重んじ、さうして天地神明を敬し、世界の文明を包容し、その中心として皇運を扶翼すべきである。爰に於て始めて個人の德も、國家の德も、世界的の德も、天地の德も、實現し來たるのであります。決して他を敵とする爲めではなく、是等の德を實現する爲めに、忠愛の精神を養ふのである。

今の時代は在來の思想と新しい思想とが入り紊れて、人心を動搖せしめて居るので、要するに我國の建國の精神を戴いて、儒敎も佛敎も能く調和し、この固有の文化を明かにして、更に西洋文明の思想も、基督敎の思想をも之を包容し、其の勝れたる所を採つて之を統一し、堂々として進んで行く覺悟がなければならぬ。

國民思想

（一）調整統一の必要

個人と全體との關係は少しも離るゝことの出來ないものであつて、個人〳〵の思想も、必ず國家なり社會なりの全體の風潮に影響せらるゝもので、非常な偉人はいざ知らず、千人が千人其時代なり其社會なりの風潮から、全然無關係にして自己の思想を保つて行くことは出來るものでない。故に全體の國民の思想を健全にすると云ふ大きな方針が定まつて、それが一人〳〵の精神修養に當嵌つて行かなければならのぬので、個人主義と云ふ方から云へば、自分〳〵が勝手に極め込んだ思想を以て、精神の修養